

民俗分類の思考

魚類の成長段階名とドメスティケーション

Some Thoughts on Folk Classification

安室 知

はじめに

- ① 水田養鯉を取り巻く環境
- ② 水田養鯉の基本
- ③ コイの成長と呼称の変化
- ④ コイの養成段階と水田・イケの使い分け
- ⑤ 後発地にみる成長段階名
- ⑥ 成長段階名の発生
- ⑦ 成長段階名にみる汎用技術と在地技術
- ⑧ 成長段階名にみる民俗分類の思考

【論文要旨】

人が動物を眺めるとき、そのまなざしは多様である。なかでも、分類と命名のあり方は、もっともストレートに、人が動物をいかに認識してきたかを表す。ここでは、近代に盛んにおこなわれた水田養鯉に注目し、コイに対する分類・命名のあり方から、日本人と動物との関係性について検討していくことにする。

ブリやボラといったいわゆる出世魚の成長段階名とコイの成長段階名との大きな違いは、そこにドメスティケーションという人間側からの働きかけが存在するかどうかということにある。コイの成長段階名は、あきらかに養殖によって生み出されたものである。コイは3年間に及ぶ継続的な飼養の中から、コイゴ→トウザイ→チューツパ→キリという4段階に及ぶ成長段階名が生み出されている。養魚技術が高度化すること、つまりコイに対する管理がより精緻でかつ長期にわたってなされるようになるとともに、人のコイに対する認識はきめ細かなものとなり、結果として成長段階名も増加することになったといえよう。

コイの場合、個々の成長段階名を検討してみると、コイゴおよびトウザイという初期の成長段階はいわば時間概念で割り切れる分類であるのに対して、成長の最終段階であるキリは明らかに魚体の質量によって決められていることがわかる。一見すると、分類基準として時間と質量という二つの概念が錯綜しているかのように見えるが、農家が養魚をおこなう上では矛盾なくかえって実用的なものとなっている。また、そのときチューツパの位置がとくに重要な意味を持っていることに気がつく。農家がおこなう養殖技術においてチューツパ段階は種々の調整段階となり、そのことにより時間の概念から質量の概念へと転換していく、ちょうどその結節点となっているからである。

はじめに

人は動物をいかに認識するか。また、そうした認識のあり方は、人と動物との関係性のなかでどのような意味を持つのか。これは、すぐれて文化的なテーマである。人が動物を眺めるとき、そのまなざしは多様である。そのなかでも、分類と命名のあり方は、もっともストレートに、人が動物をいかに認識してきたかを表すことになるだろう。ここでは、近代に盛んにおこなわれた水田養魚に注目し、コイに対する分類・命名のあり方から、日本人と動物との関係性について検討していくことにする。

魚に限っていうなら、研究対象として、その名称に本格的に注目したのは渋沢敬三が嚆矢であろう。渋沢は、魚名を「人と魚との交渉の結果成立した社会的所産」と位置づけ、「時と所と人により多くの場合複雑なる変化を示す」とした〔渋沢 1959〕。渋沢は全国各地の多様な魚名語彙を収集し分類整理するという方法をとったが、その多様さゆえに、結局のところ「人と魚との交渉」のありさまをうまく抽出することはできなかった。

魚の民俗分類と命名に関する研究は、分類自体の法則性なり意味なりを見つけだす方向性ととともに、必ずそれを伝承する人のレベルでその生活との関わりが問われること、いわば民俗分類の機能面について考察されなくてはならない〔松井 1975〕。民俗分類に代表されるように、人が自然界の存在である魚に対してきわめて「恣意的な意味付け」をおこなうことになるわけで、そうした「恣意性」のなかに内在する文化の特性や価値の体系を明らかにすることこそ重要である〔秋道 1984〕。本稿はまさに、在地に伝承される養鯉技術を通して民俗分類の機能を考察し、そこに内在する文化的特性を明らかにすることを目的としている。

いわゆる出世魚のように、その成長段階に応じて魚名が変化するものがあることはよく知られている。渋沢による魚名語彙の集大成ともいえる『日本魚名の研究』〔渋沢 1959〕によれば、日本にはそうした成長段階名を持つ魚が82種あるとされる。たとえば、よく知られるものとしては、東京方面でワカシ→イナダ→ワラサ→ブリ、大阪方面でツバス→ハマチ→メジロ→ブリなど各地でさまざまな成長段階名を持つブリや、スバシリ（オボコ）→イナ→ボラ→トドと名前を変え「トドのつまり」という言葉の語源にもなっているボラがある。

そうしたなか、本稿で注目するコイ⁽²⁾についていえば、通常は成長段階名を持つことはないが、かつてコイ養殖がおこなわれた地域ではその養成段階に対応する複数の呼称が存在していた。

ブリやボラといったいわゆる出世魚の成長段階名とコイの成長段階名との大きな違いは、そこにドメスティケーションという人間側からの働きかけが存在するかどうかということにある。ブリやボラは、漁獲されたその時点における魚体の大きさに応じて分類・命名されるもので、その魚自体が人の管理のもと成長し次の段階名に移行することはない。つまり、成長段階名とはいってもブリやボラは漁撈活動を通してなされる一回性の命名行為である。それに対して、コイは養殖という複数年にわたる継続的な人との関係のなかで段階的に命名がなされる。そのためコイを通して民俗分類や命名のあり方を理解することは、ドメスティケーションの文化的特性を明らかにすることにもつながる。

かつて水田でコイを飼うという行為はそれほどめずらしいことではなかった。とくに長野県や群馬県といった内陸県では、明治後期から昭和前期にかけて、国や県の指導により養蚕に代わる稲作農家の現金収入源として積極的に奨励された時期がある⁽³⁾。そうしたなか、全国的にみてもっとも高度に水田養魚を発達させた地域として調査地に選んだのが長野県佐久市桜井（旧桜井村）である。桜井は日本における養鯉および水田養鯉の発祥地のひとつに目される地域である⁽⁴⁾。かつて桜井を含む佐久地方に生産されるコイは「佐久鯉」と呼ばれ、市場においては一種のブランド商品ともなっていた⁽⁵⁾。

なお、ここに挙げる資料の多くは、佐久市桜井で実際に養鯉をおこなってきた人たちからの聞き書きによるもので、主として昭和初期に時間軸を設定して調査記録したものである。

①……………水田養鯉を取り巻く環境

1 桜井の概観

(1) 桜井の自然的位置（概観）

佐久平（佐久盆地）は長野県の東部、八ヶ岳や浅間山に囲まれた標高 650 メートルから 700 メー

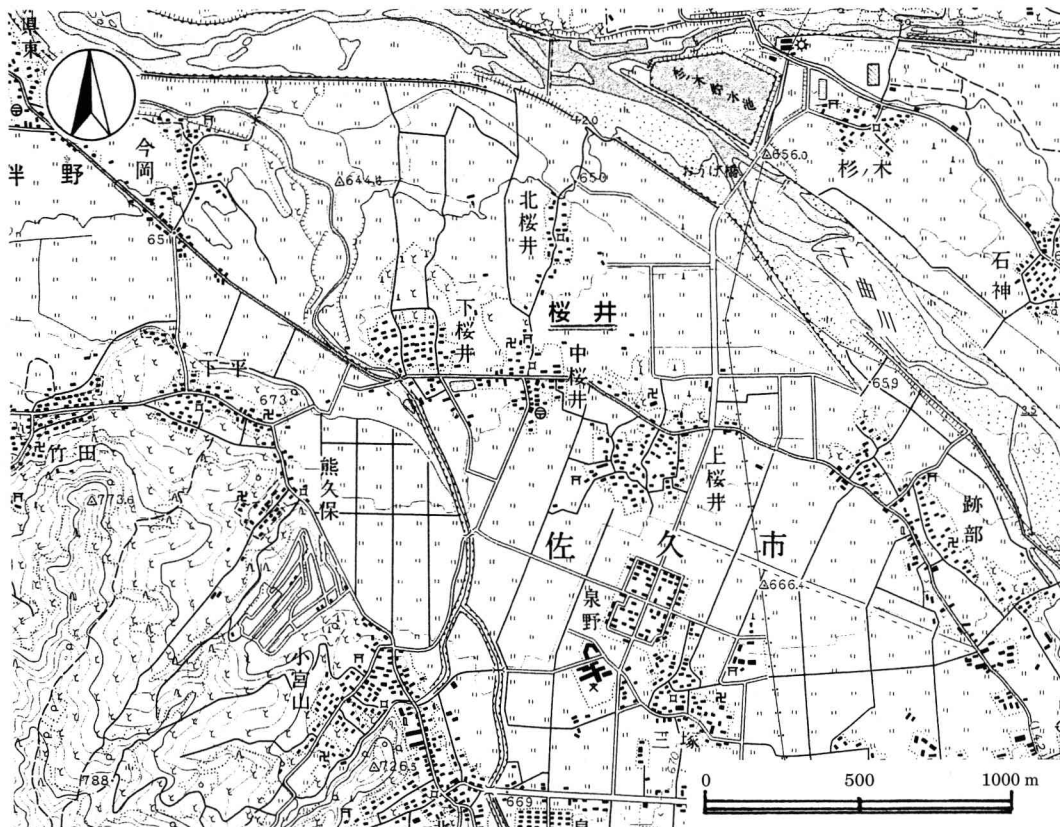


図1 佐久市桜井（国土地理院2万5000分の1地形図）

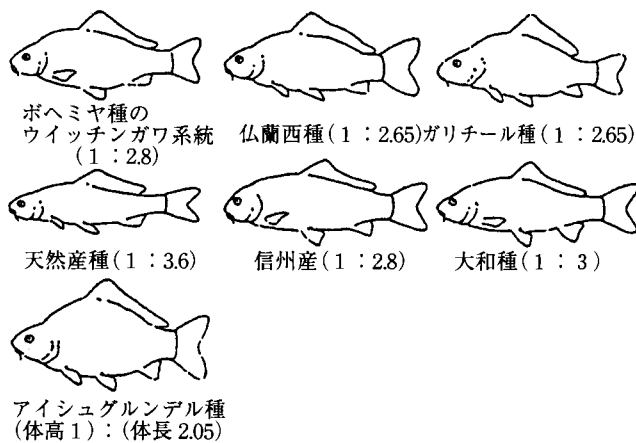


図2 コイの形態と品種（[日暮1912]より）

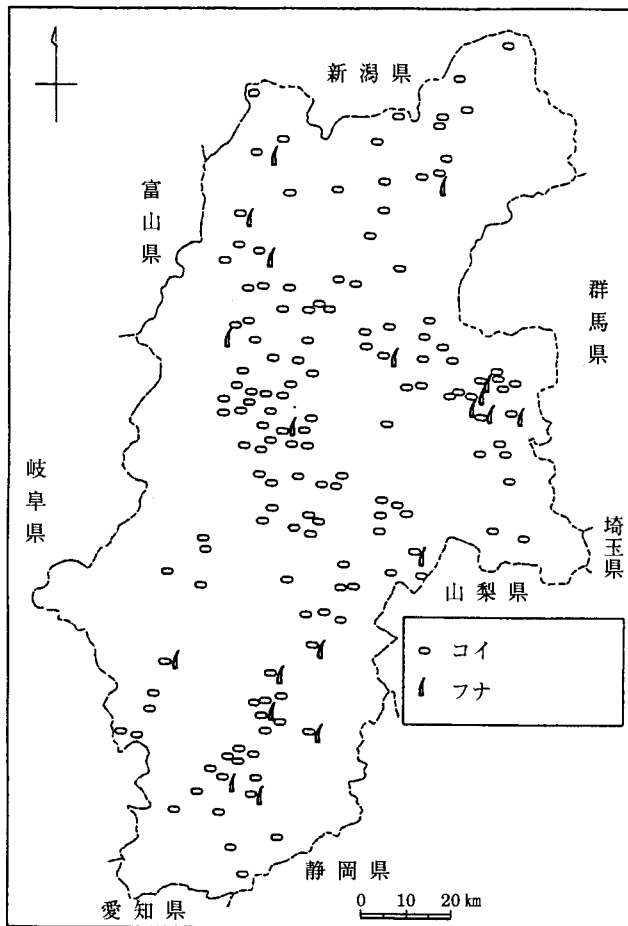


図3 長野県内における水田養魚の分布（『長野県史』民俗編 およびアンケート調査により作製）

トルの高原盆地である。その佐久平の南部に桜井は位置する（図1）。

標高の高い佐久盆地は、冬が厳しく、桜井では1月と2月の平均気温は0度以下である。それに対して、8月の平均気温は25.1度あり、気温の年較差は27.16度に達する。また、気温の日較差も大きい。つまり桜井の気候は明瞭な内陸性気候を示している。また、年降水量950.2ミリメートルは、全国的にみて水田稲作地としてはきわめて寡雨の地域に属する〔佐久市志編纂委員会1988〕。

なお、昭和5年の国勢調査によると、桜井（当時は桜井村）の総戸数は236戸である。その桜井は、東から上桜井、中桜井、下桜井、北桜井の4集落に分かれている。集落別の戸数は、上桜井89戸、中桜井57戸、下桜井66戸、北桜井25戸となっている〔桜井村1929〕。

(2) 水田養魚をおこなう人

昭和4年において、寺社などを除く桜井220戸のうち、水稲の作付をした家は189戸ある〔桜井村1929〕が、桜井村農会の調べでは養鯉をおこなった家数もちょうど189戸である〔桜井村農会1930〕。必ずしも養鯉をおこなった家がすべて稲作農家であるとは言い切れないが、ほとんどの稲作農家が水田養鯉をおこなっていたと考えてよいであろう。

水田養魚に注目すると、その関わり方により、桜井の人々を3分類することができる。

1番目が、水田稲作を中心的な生業としながら水田養魚をおこなう人

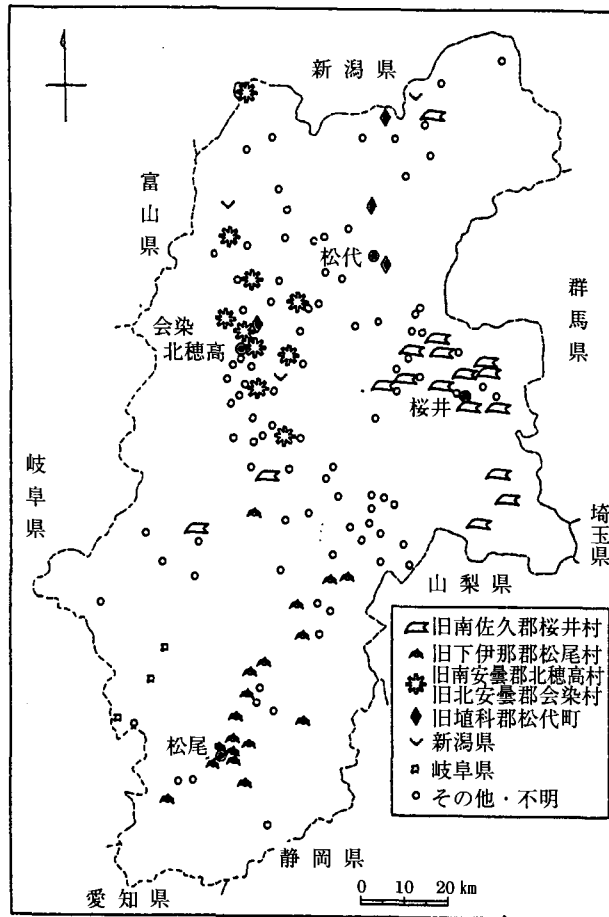


図4 長野県内におけるコイ売りの商圈 (昭和初期, 「長野県史」およびアンケート調査をもとに作製)

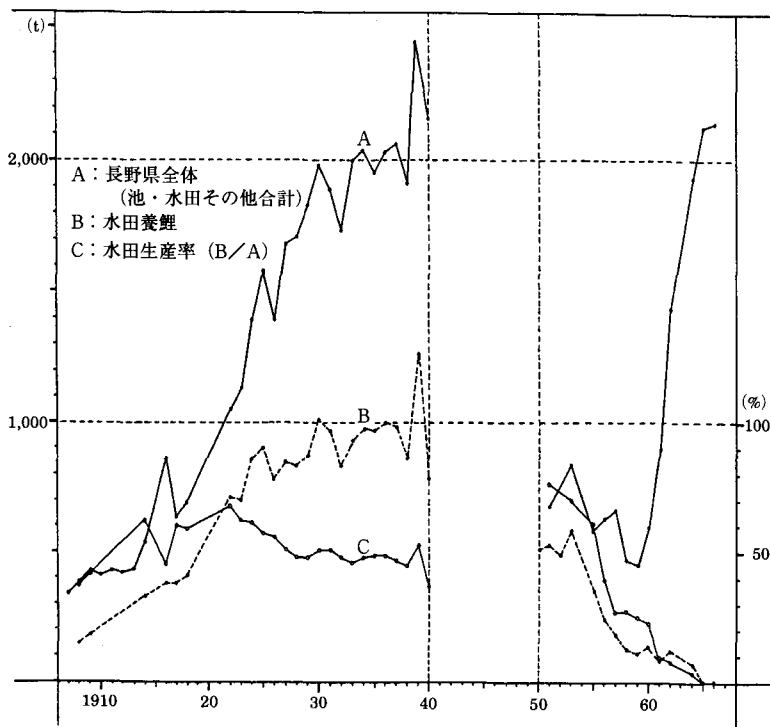


図5 長野県におけるコイ生産高の推移 (「長野県統計書」「農林統計」をもとに作製)

1941～50年は信頼できるデータなし。

たちである。人数的には桜井では圧倒的多数を占める層である。そうした層の人々にとって水田養魚の位置づけは、基本は自家で食べるくらいのコイを飼えばよいというもので、せいぜい余った分を売る程度のものであった。

2番目が、稚魚生産に特化していった人たちである。コイゴ屋（鯉子屋）などとも呼ばれる存在である。桜井220戸のなかでは15戸ほどの少数に過ぎない。コイの産卵・孵化の技術を持ち、稚魚の生産と販売をおこなうことを主生業とする階層である。水田稲作と水田養鯉についても第1の階層と同じようにおこなっている。

3番目は、1番目や2番目の階層の人たちが生産したコイを買い集めて売ることを生業とする人たちである。いわばコイの仲卸業者で、一般にコイ屋（鯉屋）と呼ばれる。人数的にはもっとも少ない階層である。また、こうした家ではコイ料理屋や割烹旅館を営んでいるところも多い。

コイとの関係からいうと、1番目の階層が生産者とするなら、3番目の階層は商品としてコイを扱う商業者ということになる。そして、2番目の階層はその両面を併せ持つ。

2 水田をめぐる

(1) 豊かな水

桜井は千曲川が造る沖積地の上にあり、片貝川などの自然河川のほか、八ヶ用水・跡部用水といった人工の用水も多く流れている。そのため、昔から桜井は用水に不自由することはなく、しかも水環境上たいへんに安定した立地であるとされる。過去に大きな水争いを経験することもなかったし、また耕地は緩やかな傾斜地になっているため排水にも優れていた。

桜井のなかでも上桜井には千曲川の伏流水が湧出する地点が多くあった。この湧水は、水田養鯉にとって大きな意味を持っている。桜井の立地する千曲川南岸の扇状地状沖積地では、桜井のほか、跡部・三塚などにも湧水地があり、そこは水田養鯉のなかでもとくに稚魚生産が卓越する地となっている〔蛭田 1933〕。

(2) 水田のあり方

桜井の耕地はほとんどが水田化されている。昭和4年の土地台帳〔桜井村 1929〕によると、水田が112町2反（112.2ヘクタール）に対して畑は23町1反3畝（23.13ヘクタール）となっている。これをもとに水田率を計算すると約83パーセントになる。ただし、この畑のうち普通畑はわずかで、その多くは桑畑であった。しかも、そうした桑畑のほとんどが、桜井の耕地というよりは、蓼科山麓部や千曲川河川敷の荒地を利用したものであった。そのため、実際には桜井の耕地は83パーセントをはるかに超える割合で水田化が進んでいたと推察される。

桜井では基盤整備以前には水田は5坪（16.5平方メートル）ほどのものから1反5畝程度のもので、その大きさはさまざまであった。一般に1反を超えるものは大きな水田とされた。昭和初期当時では、耕地全体がそうした大小さまざまな水田がモザイク状に組み合わさっていた。

(3) 水田の所有

桜井では水田を1町歩以上所有する家はまれで、住民の意識としては1戸当たり6反の水田所有が一般的であった。たしかに、昭和4年の統計〔桜井村 1929〕をもとに計算すると、1戸当たりの水田面積は約5反9畝となる。

桜井における水田所有は、水田1枚ごとではなく、水管理上のあるひとまとまりを単位としていた。その水管理上のまとまりとは、用水路から水を取り入れ、またその水を用水路へ排水するまでをいう。桜井では水が用水路から水田へ入る口をカケクチ（掛け口）、水田から用水路へ落ちる口をシリクチ（尻口）というが、つまりそのカケクチからシリクチまでが水田所有上の1単位となる（図6）。カケクチ—シリクチ間は通常2、3枚の水田で構成されている。カケクチ—シリクチ間にある水田の間では、水の出入りは直接上の水田から下の水田へと入るワタリミズ（渡り水）が基本となる。このカケクチ—シリクチの間では下の水田つまりシリクチに近いところにあるものほど面積が小さくなる傾向にある。

こうしたカケクチ—シリクチを単位として、人々は4～6カ所に分散して水田を所有していた。そのため、水田の枚数は多い家では20枚にもものぼった。ごく平均的な稲作農家であるF家を見ても、合計6反5畝の水田は面積6坪から1反のものまで11枚にわかれていた。

(4) 稲作のあり方

桜井を含む佐久平では一般に水田では稲しか作らない。つまり二毛作は昔からおこなわれていない。冬の寒さが厳しく麦の登熟が田植えに間に合わないことが主な理由として上げられる。しかし、たとえば長野市檀田の事例 [安室 1991] でもわかるように、長野県の盆地部においては昭和初期の農業技術をもってすれば、二毛作は十分に可能であったと考えられる。にもかかわらず、現実に昭和初期において佐久平では二毛作はほとんどおこなわれていなかったというのは、桜井の場合、そのことが水田における養鯉を可能にする条件のひとつになっていたからである [安室 1998]。

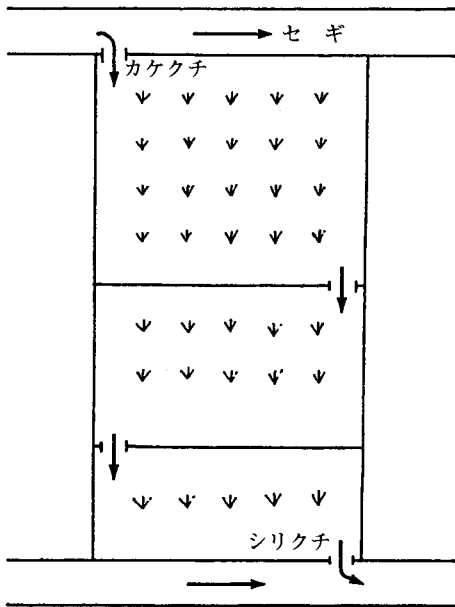


図6 水田の構造（カケクチとシリクチ）
水田の所有単位

| 作業 | 月 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|---------|---|---|---|---------|---------------|------|---|---|---|---|----|----|---------------------|
| ①スキオコシ | | | | | ハルブチ | | | | | | | | フユブチ |
| ②ゴミカケミズ | | | | (ヒガンミズ) | | | | | | | | | ゴミカケミズ |
| ③ナワシロ | | | | | タネマキ | ナエトリ | | | | | | | |
| ④アゼノリ | | | | | アゼノリ | タテワラ | | | | | | | |
| ⑤コギリ | | | | | | | | | | | | | |
| ⑥シロカキ | | | | | | | | | | | | | |
| ⑦タウエ | | | | | | | | | | | | | |
| ⑧タノクサ | | | | | イチバン・ニバン・サンバン | | | | | | | | |
| ⑨イネカリ準備 | | | | | | | | | | | | 落水 | |
| ⑩イネカリ | | | | | | | | | | | | ワセ | オクテ |
| ⑪調製 | | | | | | | | | | | | | ヒラボシ・テコキ・モミスリ・タワラヅメ |

図7 桜井の水田稲作暦

なお、昭和初期における桜井の水田稲作暦は図7に示したとおりである。「昭和4年米収穫調査」[桜井村 1929]によると、桜井村全体では水稲作付戸数は189戸で、作付総面積は1037反あった。その収穫高は2945石（530キロリットル）で、1戸当たりでは15石5斗（2.8キロリットル）になる。

3 イケをめぐる

(1) イケの分布

大正12年の桜井村農会調査[桜井村農会 1923]によると、当時桜井の集落内には354カ所のイケがあった。当時の戸数182戸で計算すると、1戸当たり1.9個のイケを所有することになる。昭和初期を想定した聞き取り調査からは、「桜井では少なくとも1軒に1個は屋敷にイケがあり」、「新たに家が建つと必ずイケもひとつ造られた」とされる。

また、水田の脇に作られる小さなイケを含めれば、1戸当たりのイケの数はさらに多くなる。稲作を主生業とする平均的な農家の場合を見てみると、たとえば前出のF家では屋敷に1カ所のほか水田の脇に4カ所の合計5カ所にイケを持っていた。どれも3、4坪ほどの面積しかなく、合計してもイケの面積は20坪に満たない。

(2) イケの特徴——流水池——

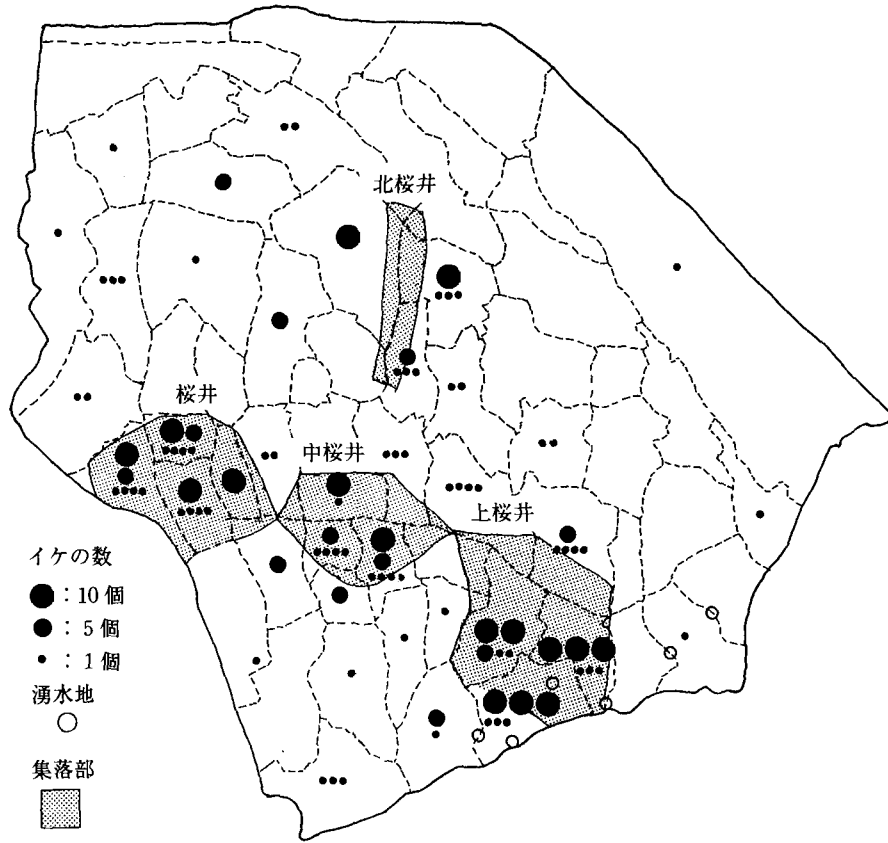
桜井ではイケといった場合、それは自然の水界ではなく、すべて人工のものを指す。その特徴は、図9に示したように、セギ（用水路）に接して取水口と排水口が別個に造られているため、絶えずイケ内の水が動いていることにある。いわゆる流水池である。水量は豊富で夏冬を通して枯れることなく、イケには必ず新鮮な水が通っている。

水が絶えず流れるということは養鯉にとって大きな意味を持つ。流水により酸素供給量が多くなり、狭い空間に、より多くのコイを飼うことができる。溜まり水では1坪当たりせいぜい4キログラムのコイ（成魚で3、4匹）しか飼うことができないが、流水池ではその数十倍のコイを入れておくことができる[富永 1979]。

(3) イケの2類型

イケの水環境は上桜井と中桜井・下桜井とでは異なっている。両地域とも河川水を主な水源とすることに変わりないが、湧水の有無についてみるとその違いが明瞭となる。

上桜井の場合、図8にあるように、域内に6カ所の湧水地点が存在しておりイケにはその湧き水が入るようになっている。そのため、イケの水温は冬は12～13度、夏は15～16度と、一年を通じてほぼ一定である。それに対して、中桜井・下桜井にあるイケには河川水しか入らないため冬は0度近くまで水温が下がり、夏は反対に23～24度まで上がる[佐久市志編集委員会 1988]。こうした水環境の違いは養鯉池としての使い分けに利用される（後述）。



| a 集落(戸) | b イケ総数(個) | c イケ総面積(坪) | c/b(坪) | b/a(個) | c/a(坪) |
|---------|-----------|------------|--------|--------|--------|
| 上桜井 72 | 182 | 929 | 7.6 | 1.8 | 12.9 |
| 中桜井 41 | 61 | 638 | 10.5 | 1.5 | 15.6 |
| 下桜井 49 | 82 | 990 | 12.1 | 1.7 | 20.2 |
| 北桜井 20 | 29 | 225 | 7.8 | 1.5 | 11.3 |
| 桜井 182 | 354 | 2782 | 7.9 | 1.9 | 15.3 |

図8 イケの分布

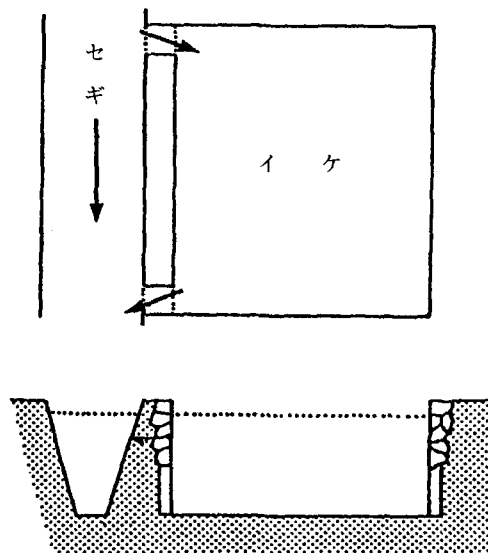


図9 イケの構造(流水地)

②……………水田養鯉の基本——3年飼養——

1 3年飼養の基本

桜井の水田養鯉の基本は、水田とイケを季節ごとに行き来しながら3年間コイを飼養することにある⁽⁶⁾。最初の2年間は、コイは夏の間は水田、秋から春にかけてはイケで過ごすことになる。

一般の農家では、当時桜井に15軒ほどあったコイゴ屋と呼ばれる稚魚生産業者から稚魚を買うことが多かった。また、なかには自家で産卵孵化させた稚魚を用いるものもあったが、それは少数である。産卵孵化をおこなって稚魚を生産するには、そのための施設と親魚の維持、さらには産卵孵化に関する特殊な技術を必要とするためである [安室 1998]。

コイが水田に入れられるのは田植え前後である。桜井の場合、田植えは、図7に示したように6月中旬になる。シロカキを終えた水田には水が張ってあるので、状態としてはいつでもコイを入れることができる。目安としては、稚魚は田植え後、2年目以降のコイは田植え前に入れる。水田の中にいるときには毎日餌が与えられる。

そうして水田の中で稲とともに育てられたコイは、稲刈り前になると落水の機会を利用して取り上げられる。それをコイアゲという。稲刈り前の9月下旬におこなわれる。そうして取り上げられたコイは、成長段階別に屋敷や水田脇にあるイケに入れられ、そこで冬を迎える。

そして、イケで冬を越したコイはまた次の年も田植え前後になると水田に入れられる。稚魚の段階から数えると、こうしたサイクルを2回繰り返し、3年目を迎え一定の大きさに達したコイは出荷される。

2 3年目の飼養法

3年飼養の場合、3年目を迎えたコイの扱いは2つのパターンがある。ひとつは、夏になっても水田に入れず、そのままイケで過ごし、秋の出荷に備えるものである。その場合、最初の2年間に



写真1 コイの給餌



写真2 コイアゲ（鯉取り）

おける水田での養成は、主にコイの肥育を主眼としてなされる。イケに比べいち早く水温の上がる水田に入れることにより、餌の食いをよくしコイを太らせる。それに対して、最後のイケでの1年間は出荷を前にしたコイの仕上げ段階といえよう。桜井のイケは、河川水や湧き水が入り、また絶えず水の動く流水池であるため、水田のように水温が上がらないからである。そうしたイケに夏も入れておくということは、コイの肥育よりも身を引き締めることが主な目的となっていると考えられる。また、水田に入れると、どうしても泥臭さが身に付いてしまうため、出荷を控えた3年目には流水池のなかで飼うのだともいう。こうした段階が3年目に設定されているということが佐久鯉の佐久鯉たる由縁であり、とくに食味上の特徴を生み出すものになっているといつてよい。

そして、2つめのパターンは、3年目もコイを水田に入れて飼う場合である。それは2年間水田で飼っても十分に大きくならなかった場合である。その要因のひとつは、水田に入れる一年鯉の数が多すぎることによる。一定面積なら数を絞って水田に入れた方がコイの肥育は良くなる。また、数量過多とは別に、当然成育の悪い一年鯉を用いたときにも十分な大きさの二年鯉にならず、3年目も水田に入れて肥育する必要がある。そう考えると、佐久地方の場合、3年目に水田に入れなくてすむコイというのは、成長に関していえば優等生である。

なお、地域的なことでいえば、長野県内広くに水田養鯉は普及し、とくに佐久地方ではすべての水田にコイが入れられていたといってもよい程であったが、桜井のように稚魚から出荷サイズのコイまでを3年かけて養成していたところのごく限られていた。詳しくは第6節で検討することになるが、桜井のようないわば養鯉先進地以外では、水田養鯉は稚魚を購入することから始まり、それをひと夏水田で育てた後は越冬させることなく(つまり二年鯉まで育てることなく)、食べたり売ったりしてしまうことが多かった。

③……………コイの成長と呼称の変化

1 成長とともに変わるコイの呼称

桜井では、表1に示したように、コイは成長(養成)段階によって、呼び名をコイゴ→トウザイ→チューツパ→キリと3回変える。

孵化してから約1カ月までのものをコイゴまたはコイッコ、コイノコと呼ぶ。漢字を当てると「鯉子」で、体長が1寸(3センチ)未満のものをいう。

なお、稚魚生産者のあいだでは、コイゴの段階をさらに細かく、ケゴ(毛子)とアオコ(青子)に分けている。ケゴとは孵化して間もないものをいう。目(頭)ばかり大きくて、体が毛のように細い。それがある程度成長して、体色が青みを帯び、形態的にほぼコイの特徴を備えるようになると、それをアオコと呼ぶ。体長は1寸ほどになっている。また、さらに細かくコイゴを1級から5級さらに特級までの6段階に区別することもある。これも稚魚を生産・販売する側の区分であり、稚魚を買う側つまり一般の稲作農家ではそうした区別はしない。

コイゴを水田に入れてひと夏育て稲刈り前に取り上げると、トウザイ(トウサイ、トウゼイ)と呼ぶ段階になる。「当歳(才)」の字を当てる。水田から取り上げるときには、体長が4寸、重さが

表1 コイの成長段階名と目安

| 成長段階 | 目 安 |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------|
| コイゴ* | 孵化後1(～4)カ月まで 体長1寸(3センチ)以下 |
| トウザイ | 孵化後4カ月から12(～16)カ月まで 体長4寸(12センチ) 重さ10匁(37.5グラム) 歩留まり(コイゴ→トウザイ)5割 |
| チューツパ | 孵化後16カ月から25(～29)カ月まで 体長7寸(21センチ) 重さ150匁(560グラム) 歩留まり(トウザイ→チューツパ)8割 |
| キリ | 孵化後29カ月以上(出荷まで) 重さ200匁(750グラム) 歩留まり(チューツパ→キリ)9割以上 |

*稚魚生産業者はケゴ(毛子)とアオコ(青子)または1～6(特)級に細分化することもある。

表2 『養鯉記』のなかの成長段階名

| 成長段階 | 『養鯉記』の記載 |
|-------|-----------------------------------------------------------|
| コイゴ | 鯉子 |
| トウザイ | 当才 当才子 ----- 当才上*1 |
| チューツパ | 中 中物 中もの 中鯉 式才 式年才 式才鯉 ----- 上式年*2 大式*2 中ノ切*2 |
| キリ | 切 切鯉 上 上物 |

なお親魚を示す記載例は、「種」「種用」「種鯉」「種用鯉」「種用上等鯉」。

*1 トウザイのうちとくに成長の良好なもの。

*2 チューツパのうちとくに成長の良好なもの。



写真3 コイゴ(鯉子)

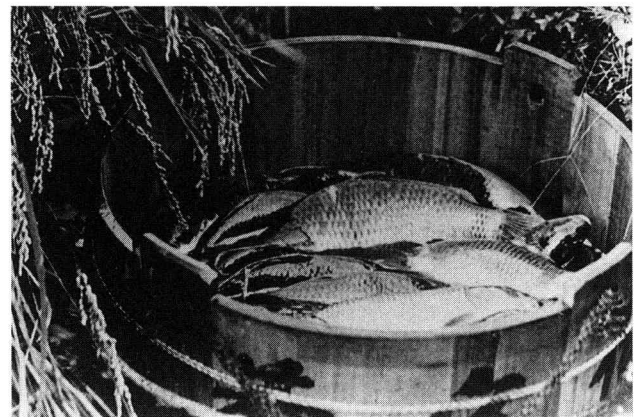


写真4 キリ(切鯉)

10匁(37.5グラム)ほどになっている。とくに成長のよいものだと、重さ13～14匁になる。しかし、水田放飼の前後を比較すると、その歩留は低く、水田に入れたコイゴのうち無事にトウザイとして収穫されるのは4～5割に過ぎない。

そうしたトウザイを翌年また水田に入れ秋取り上げるとチューツパ(チュツパ)になる。「中羽」と書く。チューツパになると、平均で体長7寸、重さ150匁ほどになる。トウザイからチューツパになるときの歩留は8割ほどある。

チューツパをさらにもうひと夏イケまたは水田で飼うとキリ(キリゴイ)となる。「切(切鯉)」の字を当てる。切身(筒切り)にして食用にすることができることからこの字が当てられるとされるが、本来は養成の最終段階を意味するものと考えられる。実際はキリは出荷できるもの、つまり売り物になるものという意味で使われることが多い。このとき重要なことは、キリの基準は3才という年齢にあるのではなく、200匁(750グラム)以上という魚体のサイズにあることである。200

匁に達しないと、たとえ3年飼ってもキリとして扱われなかった。200匁という基準は、コイを筒切にしてコイコクにしたとき、ちょうどその切身が丸く椀に収まることから来ているとされる⁽⁷⁾。チューッパからキリゴイになるとときには、伝染病など不慮の出来事がない限りは9割以上の歩留がある。

2 明治44年『養鯉記』のなかの成長段階名

ここでは少し視点を変え、文献史料を用いて、明治期におけるコイの成長段階名について検討してみる。

その史料とは、明治44年に記された『養鯉記』である[淡水魚研究会 1984]。佐久市野沢町において農業および養鯉業を営んでいた金子喜一郎が自家の養鯉作業を記録した日誌である。なお、野沢町は桜井の南東1キロメートルほどのところにあり、当時やはり佐久地方における養鯉業の中心地であった。

『養鯉記』の記述をみると、表2に示すように、コイは成長段階に応じて大きく4つに分類・命名されていたことが分かる。

第1の成長段階を示す名称が、「鯉子」である。第2段階が、「当才」「当才子」である。第3段階が、「弐年子」「弐才」「中」「中物」「中鯉」である。この第3段階は、コイの年齢で表したもの(「弐年子」「弐才」と、コイのサイズで表したもの(「中」「中物」「中鯉」)とが併存する⁽⁸⁾。また、例外的な存在として「上弐年」「大弐」「中ノ切」「中ノ切弐才鯉」という表現もあるが、これは第3段階のもののうち、とくに成長がよく、出荷サイズに達してしまったものを指している。そして、第4段階として、「切」「切鯉」「上物」がある。これはともに出荷サイズに達したものを意味している。

このほか、文中に「種用」「種用上等鯉」「種鯉」「種女鯉」とあるのは、食用魚として養成されるコイではなく、稚魚生産を目的とする親魚である。

こうしてみると、やはり明治44年においても、佐久ではコイは3年飼養を基本としていたことがわかる。また、現在同様、なかには、成長が早く2年で出荷サイズに達するコイがいたこともわかる。

以上のように『養鯉記』では、コイはおもに鯉子—当才—中(弐才)—切の4つにカテゴライズされていた。これは昭和初期の桜井の場合と同様である。そのため、例外的に2年で出荷サイズに達したコイについては、「中ノ切」のように「中」(第3段階名)と「切」(第4段階名)とを組み合わせ対称している。言葉を補えば、「中ノ切」とは、「二年鯉なのにキリゴイになったもの」といえばいいであろう。このように、基本として、4つの成長段階に対応した呼称が存在し、例外にはそうした4つのカテゴリーを組み合わせ対称していたことがわかる。

そして、もう1点ここで注目すべきは、第3段階を示す成長段階名が5つもあることである。例外的な呼称を含めると9つも存在することになる。他の段階に比べるとはるかに呼称のバリエーションが多い。そうした呼称には、年齢で示されたものと魚体の大きさで示されたものが同時に存在しており、それが第3の成長段階名をバラエティー豊かなものに行っている背景にある。またさらにいえば、この段階には、先に示したように、さまざまなかたちで例外的な呼称が設けられてい

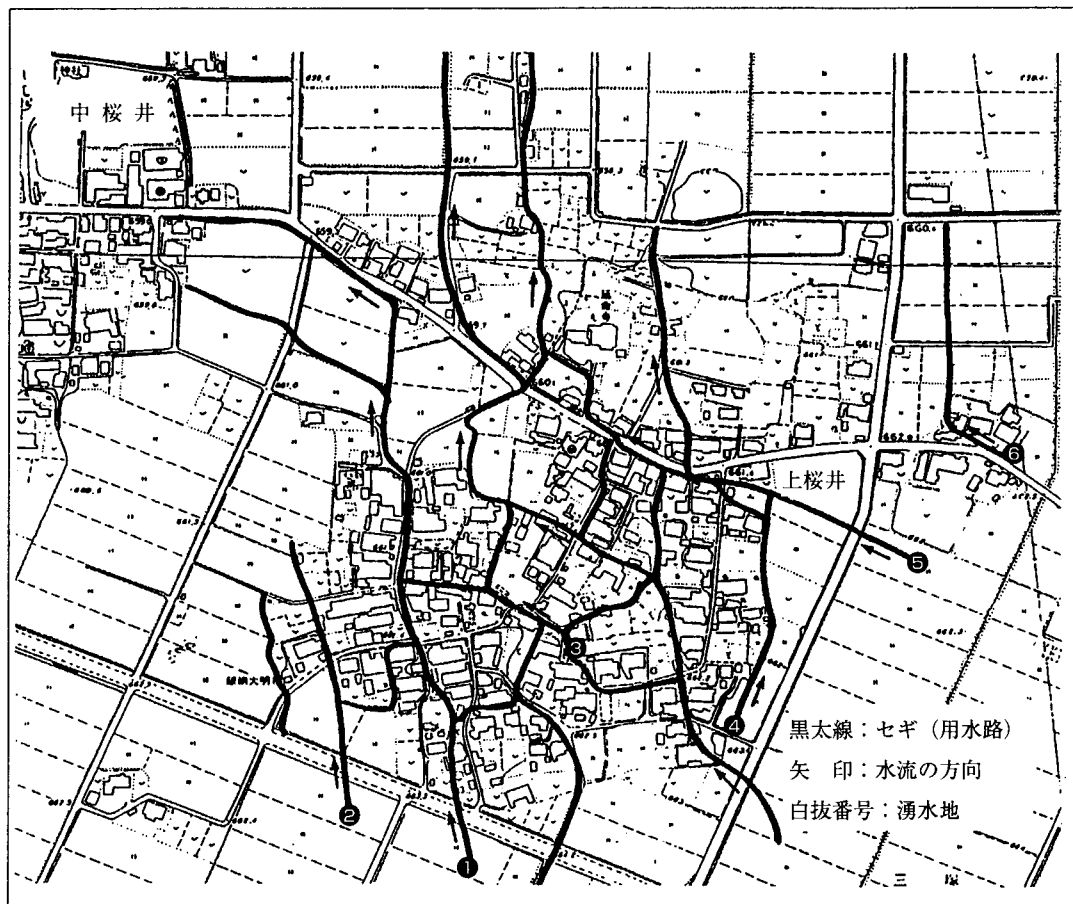


図10 湧水地点と用水路

る。この点も成長段階名を多様なものにしていく要因といえよう。こうしたことは、この成長段階が単一の分類概念では言い表すことが困難な複雑さ・多様さを持っていることを示している。この点も昭和初期の聞き取り調査において確認されることである。この点は、本論の結論として第8節3項で改めて取り上げることにする。

④……………コイの養成段階と水田・イケの使い分け

1 コイの養成段階と水田の使い分け——夏の管理——

水田は、コイにとっては夏期を過ごす場であり、人から見るとコイを効率よく肥育するための施設である。人はコイが水田のなかにいる間にできるだけ多くの餌を食べさせ、魚体を大きくしようとする。

前述のように、耕地整理される以前の水田は、一般に面積は狭く、また形もさまざまであった。当然、それぞれ水の掛り方も一様ではなかった。そのように多様な環境条件にあるからこそ、水田をさまざまな用途に使い分けて養鯉に用いることができたといえる。

養成段階による水田の使い分けが可能となる（また使い分けなければならない）背景として、まず第一に、コイの放入時期が養成段階により異なることが挙げられる。

放入の日安としては、コイゴは田植え後、トウザイやチューツパは田植え前（シロカキ後）となる。桜井の場合、例年田植えは6月12、13日ごろになるが、シロカキを終えた水田には水が張られ、いつでもコイを入れられる状態になっている。

コイを水田へ放す時期が、コイゴとそれより大きなコイ（トウザイ・チューツパ）とでは田植を挟んで前後に異なっている理由は、おもにコイの入手時期に関係している。コイゴの場合、コイの産卵期が5月下旬から6月初旬になるため、その入手は早くても田植え時分になってしまう。そのため一般農家がコイゴを入手して水田に放すことができるのは田植えの後ということになる。それに対して、2年目・3年目のコイはすでに自家のイケで越冬させているので、入手時期による制約はない。そうしたトウザイやチューツパは冬の間はほとんど冬眠に近い状態にいるため、できるだけ早く水温の高い水田に入れる方がよいとされる。それは、そうすることでコイの「目」を覚まし、より多くの餌を食べさせることができるからである。水田に移すのがたとえ1日でも早ければ、それだけコイの成長は速くなるという。そのため、トウザイやチューツパの場合には、シロカキが済み次第、田植を待つことなく、水田に放してやることになる。

そして、養成段階による水田の使い分けが可能となる背景として2番目に注目される点は、水田ごとに異なる水利条件である。それは、水温に対するコイの適応力とも関係している。

コイを入れる水田の選択と水利条件とは密接な関係にあった。図6に示したように、水田の所有上の最小単位であるカケクチーシリクチは通常2、3枚の水田で構成されていた。その単位のなかでは水は田渡し（田越し灌漑）が基本である。そうしたとき、大きな（成長段階の進んだ）コイほど低水温に対する耐性が高いとされ、そのことが水田選択の判断基準として大きな意味を持つことになる。仮に、3枚でひとつのカケクチーシリクチ単位とした場合、一番上にある水田つまりカケクチのある水田には用水路から冷たい水が直接入るため、適応力のある大きなコイ（キリやチューツパ）を入れ、その下（2枚目）の水田つまり上の水田から田渡しで水の入る水田には次に大きいコイ（チューツパやトウザイ）を入れた。そうして、もっとも耐性の低い生まればかりのコイゴは、カケクチーシリクチの単位のなかでは、もっとも下（3枚目）の水田に入れられる。上の水田から田渡しで来るうちに水は十分に暖められているからである。

この点は、また水田の水量とも関係する。民俗的な認識として、大きなコイになるほど、水田は面積が大きく、深く水の溜められるところがよいとされる。そのもっとも大きな理由が酸素の供給量である。大きいコイほど酸素を多く必要とするため、大きな水田に絶えず水を通わせ、しかも深水を保つことにより、酸素不足にならないようにしなくてはならなかった。それに対して、コイゴを入れる水田は小面積のものでよかった。管理上の都合もあり、むしろ小さな水田ほどよいとされた。酸素の必要量は大きなコイに比べると少なく、また魚体も小さいため、必ずしも深水に保つ必要もなかった。そうしたとき、カケクチーシリクチ単位の中では1枚ごとの水田は下に行くほど小さくなる傾向にあることを考えれば、やはり先に示した水利（水温）条件の場合と同じように、上の水田から順に大きなコイを入れていくことが良しとされる。

さらにいえば、放入するコイと水田選択の対応関係には、水温と酸素供給量のバランスが重要な

意味を持っている。水温と酸素供給量という2つの自然的要素に注目すると、小さなコイほど水温に強く規定されるのに対して、コイが大きくなるに従って水温よりも酸素供給量に規定される部分が大きくなっていくといえる。こうした当時の住民が有していた知識は、自然科学的に証明されるかどうかということよりも、成長段階により水田の使い分けをおこなう上で民俗の根拠として機能していたことのほうが本稿にとっては重要である。

こうしたコイの養成段階に応じた水田の使い分けは、その家で飼うコイの数量にもかかわることである。基本は、前記のように、水温や水量といった環境条件を基準にコイの養成段階に合わせて水田を選択するものであるが、そうした水田とコイの養成段階とのきめ細かい対応関係は、ある程度多くのコイを養殖する家がおこなうことである。そうした家では自らコイの仲卸業者になったり、また仲卸業者に売ることを目的としてコイの養殖をおこなうところが多かった。

それに対して、自家消費の範囲にとどまる養鯉量の家では、せいぜいコイゴを入れる水田だけは区別するが、それ以外のコイ（トウザイ・チューツパ）は同じ水田に入れてしまうことが多かった。たとえば、標準的な桜井の稲作農家であるF氏は11枚ある水田すべてにコイを入れていたが、3ショーマキ（面積の単位）の水田1枚にコイゴを入れ、それ以外の10枚の水田にはすべてトウザイとチューツパを一緒にして入れていた。また、先に示した基準とは別に、水田の除草を目的としてコイゴ用の水田にわざとキリを混ぜたりすることも、自家消費の範囲で養鯉をおこなう家ではよくあることであった。それは、大きなコイほど除草効果が高いとされるためであるが、背景には自家消費の範囲にとどまる稲作農家だからこそ、コイ養殖に過度に特化しない柔軟な農家経営の発想が存在したといえよう。

2 コイの養成段階とイケの使い分け——冬の管理——

桜井のイケには、用水源からみて2つのタイプがあることは前述の通りである。河川水を主水源にするものと湧き水が入るものの2タイプである。河川水を主な水源とするイケは水温が冬と夏とでは大きく変動するのに対して、湧き水を水源とするイケの場合には水温は1年を通してほぼ一定で、そのため相対的に冬に暖かく夏に冷たい水となる。

この水温変動の有無がイケの多様な使用および地域ごとの役割分化を可能にしている。湧き水の多い上桜井のイケは冬でも水温が12～13度と暖かいために、コイの越冬に適している。とくにトウザイと呼ぶ一年鯉は寒さに弱く、湧水の入らない中桜井や下桜井のイケでは越冬させることができない。

しかし、反対に三年鯉の飼養には上桜井のイケは向かない。というのは、前述のように、コイは3年間飼養してキリと呼ぶ食用（出荷）サイズの成魚になるが、その3年目の仕上げには夏の間も水田に入れずにイケで飼うことが多かった。そんなとき、湧水のため夏でも15～16度にしか水温の上がない上桜井のイケでは、コイ養殖の最適温度（20～25度）に達しないためうまく仕上げることができない。そんなとき、河川水を主とする中桜井・下桜井のイケでは水温が23～24度になるため、コイは餌の食いもよく、身を絞めながらかつ痩せさせることなく効率よく仕上げることができる。

また、1軒の家でも、その所有するイケは何か所かに分散していることが多かった。大きく分け

ると、水田脇にあるイケと屋敷に作られるイケである。この違いによってもイケは使い分けられる。

前出の一般的農家であるF家の場合には、屋敷にある1つのイケと水田脇の4つのイケとを成長の段階に応じて使い分けていた。水田にあるイケには、キリになる前つまりトウザイとチューッパが入れられていた。しかも、その4つのイケはさらに養成段階により使い分けられている。4つのイケのうち、用水の流れに沿ってもっとも上にあるものにトウザイを入れ、その下にある3つのイケにはチューッパを入れた。そして、屋敷内にあるイケにはいつでも食べられるようになったキリ(三年鯉)を入れている。もっとも多きときには屋敷内の4坪ほどのイケに80貫(320キログラム)ものキリが入れられていた。わずか4坪のイケに80貫ものキリを入れることができたのは、前述のように、屋敷内のイケがたえず取水口から新しい水を取り入れては、同時に排水口から古い水を排水する構造になっていたからである。

この他、イケの使い分けということ言えば、稚魚生産をおこなっている家には、タネゴイ(種鯉)専用のイケもあった。タネゴイとは産卵させるための親魚である。このイケには1年中タネゴイしか入れられず、同時にそこは5月になると産卵池にされた。

以上、検討してきたように、桜井の水田やイケはコイの成長段階に応じてさまざまに使い分けられていた。そうした使い分けは、桜井の場合、耕地整理以前の水田が有した多様な水土環境を基盤とするものであったし、ときに高冷かつ寡雨という稲作地としては恵まれない環境条件を逆手に取るものでもあった。また、カケクチーシリクチといった水田所有や水田水利のあり方など水田稲作をめぐる社会的諸条件に対応してなされるものでもあった。

さらには、低水温に対する耐性や酸素必要量といった、生物としてのコイに関する知識の体系化もそこには必要とされた。水田やイケの使い分けは、そうしたコイについての詳細な民俗知識に基づくものであり、そのもっとも根本にあるものがコイの成長段階に応じた分類・命名である。歴史的には、水田とイケを循環する飼養システムが長期化しそして精巧なものになるほど、コイに対する認識も精緻さを増していったと考えられよう。

⑤……………後発地にみる成長段階名

1 長野市犬石の水田養鯉

(1) 水田養鯉をめぐる環境と歴史

長野市犬石は、善光寺平の西部山地(通称「西山」^{にしやま})に位置する棚田稲作地である(図11)。傾斜地に拓かれた棚田には、ごく小規模な溜池が点々とある。それが水田のおもな用水源となっている。そうした溜池を一般にイケと呼ぶが、その特徴は、水田を掘り込んで作ったもので、何年かして水漏れなどのため溜池の用をなさなくなると次々と場所を変えていくことにある。そのとき、新たに水田が潰されてイケになると同時に、それまでイケであったところはまたもとの水田に戻される。つまり犬石の場合、イケと水田は相互に転換可能な空間であり、それが水田とともに養鯉の場として重要な意味を持っている。

犬石では水田とイケを組み合わせた養魚が昭和20年代までおこなわれていた。いつ頃から犬石

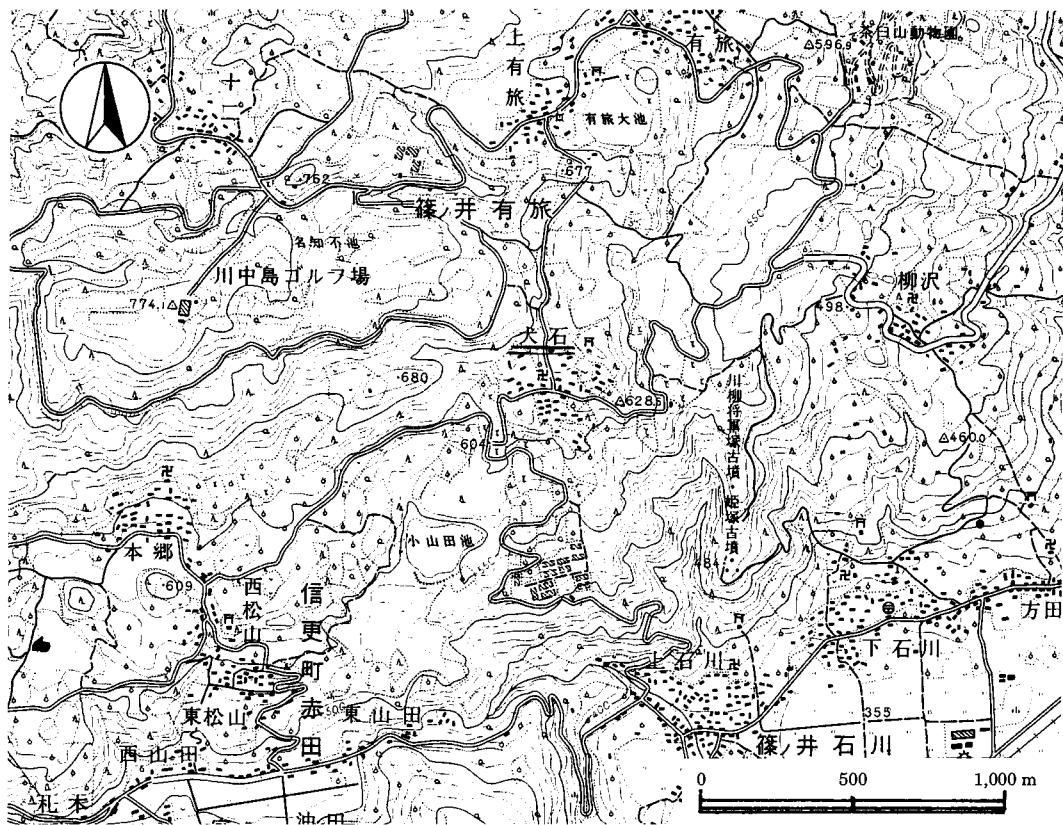


図11 長野市犬石 (国土地理院2万5000分の1地形図)

で養魚がおこなわれるようになったかは、昭和初期に時間軸をおいた聞き取り調査からは不明である。ただし、コイの稚魚を購入に頼っていることから考えて、犬石における養魚の起源は、桜井のような養魚先進地において稚魚の供給体制が整って以降であると考えられる。

(2) 水田養鯉の実際

犬石の人々は田植えが終わると、所有する水田にコイッコ（体長1寸に満たないコイの稚魚）を放す。コイッコは田植えが終わるころ天秤棒に桶を担ぎやってくるコイッコウリ（鯉子売り）から買う。自家でコイッコを生産することはない。犬石の場合、コイッコは佐久地方で生産されたもので、コイッコウリも佐久地方からやって来る。第2次大戦後は農業協同組合であらかじめ各農家から100匹単位で注文を取り、村で一括してコイッコを購入することもあった。

水田に入れられたコイッコはひと夏そのなかで過ごし成長する。餌はとくには与えられない。餌だけでなくコイに関しては何ら管理らしきことをしない。そうして稲刈り前になるとコイを収穫する。収穫はまず水田にヨケ（排水溝）を作り、それから水を落とす。水が少なくなるにつれて水田じゅうに分散していたコイがヨケに集まってくる。ヨケは本来水田を乾燥させるためのものであるが、結果としてコイを1カ所に集める役目を果たしている。そのため、収穫作業はヨケに集まったコイを掬い取ればよかった。

コイは水田から上げたときには、体長4～5寸（12～15センチ）になっている。ただし、イタチや鳥に食べられてしまうため、放流数に比べ収穫できる数は半分以下に減っている。

水田から取り上げたコイは、その後各農家が所有するイケに入れられる。そこで越冬し、さらに数年育てられる。ただし、餌は与えられることはない。ひとつのイケにコイを集中させると成長が良くないため、1戸当たり3個ほど所有するイケに分散して入れるようにした。溜池に入れられてからは、二度と水田に移されることはない。

以上のように、犬石における養鯉は全般に粗放的である。水田および溜池では給餌などの管理はほとんどおこなわれず、とくに溜池ではそのコイが何年前に入れられたものなのかさえ、はっきりとは把握されていない。そのため、その収穫もイケを移動する（水田に戻す）ときなど偶発的なもので、そうした機会でもないかぎり、わざわざイケのコイを取るということはなかった。

2 コイの成長段階名

(1) 2段階の命名

犬石の水田養鯉はまず稚魚を購入することから始まるが、その購入時点における段階名がコイッコである。コイッコは購入後すぐに水田に入れられ、稲刈り前に水田から上げられるときにはコイと呼ばれるようになっている。成長段階名からすると、この時点で稚魚はコイと呼ばれる成魚の段階に達したことになる。

ひと夏水田のなかで育てられただけではまだ食用には適さないため、その後は溜池に移されて飼われることになる。ただし、前述のように、溜池に入れられて以降は水田のとき以上に人はコイに無関心となり、給餌はもちろんのこと、いっさいの管理はおこなわれない。イケの移動や修理などの機会に偶発的に取れたコイが、食用に適する大きさのものであれば、それを自家に持ち帰り料理して食べるだけである。そのとき、そのコイが何年前にイケに入れられたものなのかはよく分からないとされる。当然、コイの正確な年齢（飼養年数）は把握されていない。大きさの違うコイがいれば、大きなものは小さなものより前に入れたものと考えられる程度である。

犬石では、コイはその成長に応じてコイッコからコイへと呼称が1回変わるだけであり、いわば稚魚と成魚という区別しかなされていないことがわかる。また、水田に入れる前と後でコイの呼称が変わっていることから、呼称変化の契機としてやはり水田が重要な意味を持っていたことがわかる。

なお、犬石以外の水田養鯉の後進地では、コイゴを水田でひと夏育てた後そのまま食べてしまうところが多い。山間の溜池灌漑地である犬石の場合は、稲作農家はいくつかの個人有の溜池を持っていたため、それをコイの再放流場所に使うことができたわけである。しかし、そうした個人の溜池をもたない平坦部の稲作地では、佐久のような養鯉の先進地を除いては、水田から取り上げたコイをその後も生かしておく場所がなかったといえる。

また、昭和30年代になり塩田平（長野県上小地方）のような溜池地帯で、溜池を利用した養鯉が大々的におこなわれるようになってくると、農家でひと夏育てられたコイ（いわゆるトウザイ）が、仲卸業者により買い集められ、溜池養鯉用の種苗として出荷されるようになった。なかには、そうした仲卸業者がトウザイ生産を目的として、契約した農家にコイゴをひと夏だけ水田で育てさせるという新たなかたちの水田養鯉もおこなわれた。

後進地の場合、コイゴを水田でひと夏飼った後すぐに食べてしまうにしろ、また売るにしろ、水

田養鯉をおこなう一般農家からすると、コイはひと夏しか飼うことはない。そのため、成長段階名としては、コイゴの次はあくまでコイでしかないのである。

(2) 養鯉先進地との違い

コイゴの供給を得てはじめて水田養鯉をおこなうような後発地では、コイゴの次はコイという名称しか存在しない。当然、コイはひと夏水田で過ごすだけのため、トウザイやチューツパという段階は存在しない。養殖技術としては素朴な段階にあるとあってよい。水田でひと夏育てられたコイは池に入れられるが、その後は何ら管理されることなく、年齢（飼養年数）や数さえ忘れられてしまう。そのため、その後は、前述のように、イケの修理や移転の機会にたまたま大きくなったコイが取ればよしとするだけである。ここに至っては、養魚をしているという自覚さえ犬石の人にはないといってよい。池で取れたコイがいったい自分がコイゴから育てたものなのか、または天然のものかという判断はつかないといってよい。ただし、民俗的認識としては、イケにいる魚のうちフナは自然に殖えたものだが、コイはあとから入れられたものであるとされる。

図4に示したごとく、佐久地方のように親魚養成と産卵孵化の技術を有し、稚魚からキリゴイの生産まで一貫しておこなういわば養鯉先進地は長野県には4地域しかなく、むしろそうした養鯉先進地から稚魚の供給を受けることではじめて養鯉をおこないえた犬石のような稲作地の方が圧倒的多数を占める。

『日本魚名の研究』には、日本各地からコイの成長段階名が集められている〔渋沢 1959〕。それによると、ブンショウ・コジロ・ナメイゴ・アワゴなどさまざまなものがある。それらはほとんどすべてが、幼魚段階の名称である。幼魚と成魚とのあいだに名前を設定しているところ、つまり3段階以上に命名がなされているところはない。つまり、コイの成長段階名を持つところでは、ほとんどすべての地域において、幼魚段階の次はコイ（成魚）なのである。この点は、犬石の事例でみたコイッコ→コイという2段階と同じである。

なお、孵化後1年以下の子魚に、トウザイとコイゴの区別がなされるのは、佐久地方のような産卵孵化の技術を有する進んだ養鯉地だからこその特徴であるといえる。コイゴは孵化から最初に水田に入れられるまでの間の稚魚をいい、トウザイはコイゴがひと夏水田で過ごした後の段階名である。つまり、佐久の場合は、孵化後わずか4カ月の間にこうした2段階の命名がなされていることになる。成長段階としていわば到達点を示すキリを除くと、コイゴの期間が他の2つの成長段階の期間のなかではもっとも短い。それは、反対からみれば、コイゴと称されるのは短い期間ではあっても、その間にもっとも大きく魚体に変化するときであるといえよう。

トウザイという段階名は、コイのような養殖魚に限らず、天然魚においても存在する。たとえば、静岡県ではナマズ、宮城県ではボラ、岡山県ではクロダイの成長段階名となっている〔渋沢 1959, 室山 1982〕。そうした魚類に共通するのは、かならず成長段階における一番最初の段階名としてトウザイが位置づけられることである。つまり、天然魚の場合には、トウザイ以前の成長段階名は存在しないといってよい。

そうしたことを考えると、トウザイ（当歳）が意味する孵化後1年以下の段階で、コイゴ→トウザイという2段階に命名されるのは養殖魚に特徴的なことであるといえる。天然魚に比べ養殖魚の場合は、孵化の段階から絶えず人の目が注がれていることの証である。この点はいわばドメスティ

ケーションが成長段階名の決定に与える影響のひとつといえよう。

⑥……………成長段階名の発生——小括 1 ——

1 「養殖」の持つ意味

渋沢敬三は魚類の成長段階名が成立する生物学的背景として、「魚類の移動性と隠顕」「幼魚の棲息場所」「魚類出現の季節的变化」の3点を挙げるとともに、その経済的要因として、魚類の各成長段階ごとに商品となりえること、各成長段階ごとに相当量の漁獲があること、各成長段階の出現時期に季節的变化があることの3点に注目している〔渋沢 1959〕。このように生物学的背景とともに経済的な要因に注目した点は、当然のことではあるが命名という行為が経済性を反映したすぐれて文化的なものであることをあらためて教えてくれる。

また、室山敏昭は鳥取県の一小漁村を取り上げて、そこにおける成長段階名について言語学的な考察を加えている〔室山 1977〕。それによると、成長段階名が成立する要因として、成長に応じて魚体が急激に大きくなること、成長の各段階がそれぞれ美味で人々の要求があること、成長段階のそれぞれが漁獲の対象となること、歴史的にみて長期にわたる漁獲がなされることの4点を挙げている。そのとき注目されるのは、調査対象地において成長段階名を持つ魚類は歴史的にも経済的にも当地において中心的な漁獲技術である地引き網漁の主要な漁獲対象であることを明らかにした点である。この点も、渋沢の指摘と同様に、魚類における成長段階名の成立が経済的要因に大きく左右されることを明らかにしている。

では、コイの場合はどうであろうか。渋沢や室山の考察が天然の魚類を対象とした漁撈行為に注目してなされたのとは違って、コイの場合、成長段階名の有無は明らかに養殖と深く関わっている。しかし、養殖はいわば漁撈以上に経済性の高い生業活動である。そのため、成長段階名成立の要因を明らかにしようとするとき経済的側面に注目したことの先見性は認めつつ、ドメスティケーションとの関わりを問うことなく、渋沢や室山の指摘をコイにそのまま当てはめることはできない。当然、ドメスティケーションの側から成長段階名の問題を考えることも必要であろう。ドメスティケーションには、その知識・技術の体系のなかに必然的に分類・命名という行為が付いて回ることになるからである。

繰り返し述べているように、コイの場合、自然の状態では成長段階名を持つことはほとんどない。たとえ持っていたにしろ、コイゴのように幼魚のときのみ認められるもので、成魚を意味するコイと差別化するための段階名であるといえる。つまり、幼魚と成魚の2段階に成長段階名は限られている。しかも、こうした2段階の命名の場合でさえも、その多くは長野市犬石の事例にみたように、幼魚を購入してそれをひと夏だけ育てるような養魚後発地（技術的には自然段階に近い地域）であったと考えられる。コイゴの名称は自然段階においても成魚との対比で存在した可能性は否定できないが、コイゴと成魚との中間段階名となるトウザイやチューツパについては、コイの場合は養殖段階になって初めて登場したといえてよい。

このように、コイの成長段階名というのは、養殖によって生み出されたものであるといえてよか

⁽⁹⁾ ろう。さらにいうと、コイの場合には、成魚になるまでに要する数年間に及ぶ継続的な管理のなかからその成長段階名は生み出されている。コイゴを購入に頼っている養魚後発地（つまり産卵孵化の技術を持たない地域）においてはコイゴ→コイといった幼魚→成魚という2段階の命名しかできないのに対して、卵段階から体重750グラムの成魚段階に至るまで一貫して成育する養魚先進地においては、コイゴ→トウザイ→チューッパ→キリというように4段階にも段階名が増える。そのことはまさに成長段階名の数は人とコイとが関係する期間（飼養期間）の長期化および養殖技術の高度化に比例していることを示している。養魚技術が高度化すること、つまり人のコイに対する管理がより精緻にかつ長期にわたってなされるようになってくるとともに、人のコイに対する認識はきめ細かなものとなり、結果として成長段階名も増加することになるといえよう。

なお、同じ佐久地方における養殖魚でもフナなどは天然・養殖とも成長段階名を持つことがないことを考えると、養殖段階になって初めて成長段階名を持つというのはコイに特徴的なことであるといえる。同じ養殖魚でも、成長段階名を持つものと持たないものが存在することは、ひとつは養殖期間の長さに関連する。コイは先に述べたように3年かけてやっと750グラムという出荷段階に達する。それに対して、佐久地方で養殖されるフナは1年で出荷サイズに達してしまう。佐久の養殖フナの場合、出荷サイズは5センチ程度のもので、それ以上では市場価値がほとんどない。そのため、生物学的には可能なことではあるが、2年3年と養成期間を延ばして、より大きなサイズにまで育てることはしない。そうした差が、同じように養殖される魚であっても成長段階名の有無という違いをもたらす大きな要因になっていると考えられる。

2 呼称が変わるとき

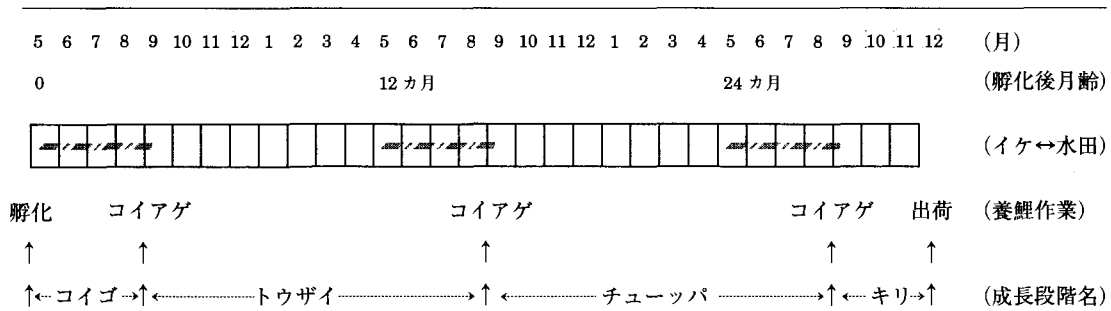
(1) 水田が転換点として大きな意味を持つこと

成長段階に応じていくつもの呼称を有するということは、呼称が変わるごとにコイに対する人の認識が新たになることを意味している。そのため、命名の前段階として、人はコイの生活暦に認識の転換点となるいくつかの区切りをつけていることになる（図12）。

桜井では水田とイケとを行き来させながら3年かけてコイを出荷サイズまで育てるが、その3年間の生活暦に人がどのような区切りをつけるかが問題となる。コイからみれば、一連の流れである3年という期間に、人は3つの区切り（孵化と出荷を入れれば5つの区切り）をつけ、4つの成長段階名を与えているのである。ここでは、コイゴ→トウザイ→チューッパ→キリと変わっていくときの3つの転換点（→の部分）に注目する。コイの生活暦のどこに句点を打つかは、まさに人によるコイの管理の仕方、つまりはドメスティケーションのあり方と大きく関わってくる。

では、桜井ではどの時点でコイの成長段階名が変わるのであろうか。ひとことでいえば、それは夏のあいだ水田に入れられていたコイがイケに移されるときである。さらに時期を限定すれば、水田から上げたその時点を境に呼称が変わることになる（つまり水田の中にいるときはまだ入れられる前の成長段階名で呼ばれている）。コイゴからトウザイ、トウザイからチューッパ、チューッパからキリ⁽¹⁰⁾、すべてにそれは当てはまる（卵からコイゴも同様）。

水田から上げられたときに名称が変わる理由として考えられるのは、ひとつには、水田のなかにいるときにコイは1年のうちでもっとも成長するときだからである。水田に入れる前と後とは格




*  : コイが水田にいる期間

図12 コイの生活暦

段に魚体の大きさが違っている。この時期コイは1年のうちでもっとも旺盛に餌を食べ、体を大きくする。そのために水田にコイを入れるのだから、それは当然といえば当然のことであろう。佐久平では、イケで過ごす秋10月から春4月までの間（7～8カ月間）は、時間的にはコイが水田に入れられている期間（4～5カ月間）よりも長いが、水温が低いためコイは餌をほとんど食べず、したがって成長もしない。

そして、もうひとつの理由として考えられるのは、サギやイタチに食べられたり、また自ら逃げ出したりしてコイの数が大きく減少するのが、やはり水田に入れられているときだからである。水田養鯉をおこなう者にとって、この期間のコイの歩留まりは重大な関心事である。

だからこそ、水田に入れられた期間をうまく生き延び、かつ魚体が入れる前に比べると格段に大きくなって戻ってくるコイに対して、人々は新たな気持ちで迎えることになるのである。

また、コイの呼び名が水田に入れられる前後で変化することは、佐久地方の養鯉にとって水田の存在がいかに大きなものであるかということを示すひとつの傍証となる。

水田から上げられるときがコイにとって呼称の変わる契機となっていたことは、養魚をめぐる儀礼のなかにも現れている。養鯉に関しては唯一の儀礼であるといつてよいコイアゲの祝(11)いがおこなわれるのが、まさにコイを水田から取り上げたそのときなのである（写真2）。コイアゲのときに唯一の儀礼が設定されるということは、その時点がコイの飼養期間におけるひとつの大きな折り目として意識されていたことの証となる。

(2) 成長段階名の変化は自然から人為への移行期になされること

同じように成長段階名を持つブリやボラの場合をみても、それらの魚は海から漁獲された時点において、その魚体の大きさに応じて成長段階名が付与されている。この点は、3年間にわたって継続的に養成され、その過程で呼称が転換していくコイとは大きく異なっている。

しかし、個々の呼称が付与される契機を考えると、コイとボラ・ブリとの共通点も見えてくる。ブリやボラの場合、漁撈行為を通して海という自然界から人の手に魚が移ったときに名称が付与されていると考えることができる。さらにいえば、それは自然界に生きる生物としての魚類から商品としての海産物に変わったときである。つまり、自然から人為への移行に際して名称の付与がなされているといえる。そのこと自体は命名の行為としては至極当然のことであろう。

その点をコイについても考えてみると、水田からイケへと移行するときに名称が付与されている

わけで、それはまさに自然から人為への移行期に当たっているといえる。水田とイケを対比的に捉えると、佐久地方の人々にとって、水田はコイの成長を促す力を秘めた自然度の高い空間であるのに対して、イケは人為度の高い空間つまり人の目が行き届き管理しやすい場ということになる。

水田内のコイは稲に隠れてほとんど人の目に付かないところにいる。また先にも述べたように、水田にいる間はコイがもっとも成長するときであり、水田に入れる前後ではその姿は一変している。水田から取り上げたときこそ、まさに人が自然の力を実感するときであるといえよう。

そのように、水田養鯉を通して佐久の人々が、本来高度に管理された人為空間であるはずの水田に自然の力を感じるということは、日本人の自然観のあり方とも共通する。筆者はそうした自然観のあり方を「内なる自然」と表現したことがある〔安室 1996〕。

⑦……………成長段階名にみる汎用技術と在地技術——小括2——

1 汎用技術の中の成長段階名

これまでに刊行された農家向けの養鯉手引き書⁽¹²⁾をみても、コイの成長段階名と養殖技術（ドメステイケーション）との関係について興味深いことがわかってくる。また、成長段階名に注目することで、いわば全国共通ともいべき手引き書に示された養殖に関する汎用技術と佐久において口承される在地の技術との相違がより明確⁽¹³⁾になってくる。表3では、調査対象とした昭和初期を中心に、大正年間から昭和50年代にかけて出版された農家向けの啓蒙書を中心に取り上げてみた。

こうした農家向けの養鯉手引き書を概観してまずわかることは、コイはあくまで2年間で成魚として出荷できるまでに育てることが経営上良しとされることである。そうした2年で出荷サイズまで育てるときには、コイの成長段階名は通常3つしか存在せず、それはコイゴ→トウザイ→キリとなる。

そうしたとき、佐久のように3年かけなくては出荷サイズにまで育てることができないのは、低水温地帯など養鯉にとっては環境条件の悪いところに限られるとされる。必然的に3年飼養は効率が悪く、農家にとって利も薄いとされる。

そうした3年飼養の場合に、特徴的にみられる成長段階名がチューツパやナキである。それは通常トウザイからキリになる途中に位置する。つまりコイゴ→トウザイ→チューツパ・ナキ→キリという4段階の成長段階名となる。そのため、2年飼養地において、チューツパやナキの成長段階を持つこと、つまり3年かけなくては出荷サイズにならないコイがでてしまうことは、養魚をおこなう農家からは嫌われることになる。

いくつかの手引き書にみられるように、ナキやチューツパの語源が、ナキは養鯉家泣かせ、チューツパは中途半端の意味であるというのはまさにそうしたことを象徴している。その語源の真偽は別にして、3年飼養しなくてはならないときに発生する段階名であるチューツパやナキは、こうした一般的な手引き書ではマイナスイメージで扱われることになったといえよう。全国共通の汎用性を有し、2年飼養を基本に、より効率的な技術の解説を旨とする手引き書においては、それは当然のことであるといえよう。

表3 養鯉ガイドブックのなかの成長段階名

| 書名・刊行年 | 本書内容 | 解説(筆者) |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ① 『趣味実益最新養鯉法』 大正 14 年(1926) | 稲田養鯉について、「稲田に放養をなし得るは二歳までにして三歳鯉は不可能なり、故に別に池等放養をなし得る場所を所有せざれば、二歳の秋季に於て食用となし或は売却するものなり」といい、「二才の秋期に於て食用となし得ざるもの即ち百匁以下のものは尚一カ年投餌するの必要あり」とする。 | コイは2年で成魚にすることを養殖の基本としている。また、説明は一貫して、一歳鯉・二歳鯉というような年齢に応じた分類をもとになされている。 |
| ② 『実地応用養魚の研究』 昭和 7 年(1932) | 養鯉は「本年孵化発生した鯉児を、翌年秋から三年目の春季産卵時期迄に、食用鯉に仕立てて販売する二年収納法」が基本とされる。3年以上かけて収納するのは、「北海道のような寒地か山間で用水が溪流で冷たいとか、湧き水のある地盤で鯉が育ち難いとか云う様な特殊な場合にのみ行う可きである」とされる。 「二年収納法」で2年目の秋できたコイのうち、30匁前後を「吸物鯉」、70~80匁を「ナキ」、100~120匁を「中羽」「中羽物」、120~180匁を「食用小物」、180~250匁を「食用物」「切鯉」、250匁以上を「食用大物」という。なお、「ナキ」「中羽」「吸物鯉」は、再び3年目も飼育池に入れられるため、「通返」とも総称される。 | 本書によると、池中養鯉では、2年で出荷サイズまでコイを養成するのがもっとも効率よい養殖法とされる。そのため、正規の出荷サイズとなる「食用小物」「食用物」「切鯉」「食用大物」に達しない「ナキ」や「中羽」は、養鯉家泣かせの中途半端な物というマイナスイメージから付けられた呼び名だとされる。なお、「吸物鯉」とは吸い物の具にしかならないという意味であるが、ある程度そうした需要は見込めたため「ナキ」や「中羽」ほどマイナスイメージを付与されていない。 |
| ③ 『水産増殖の智慧』 昭和 18 年(1943) | コイを養成する段階として、「鯉子」を水田で飼ったのち池で越冬したものを「当歳」といい、それをまた水田に入れて9月下旬に落水とともに水田から取り上げたものを「切り鯉」または「食用鯉」とする。 | 本書は、水田養鯉では2年で食用サイズにコイを養成することを当然とするもので、成長段階名も鯉子→当歳→切り鯉という3段階しか示されない。つまりチューッパの段階は完全に無視されている。 |
| ④ 『養魚講座 1 鯉』 昭和 46 年(1971) | * 『実地応用養魚の研究』(1932)の記載に一部共通する。 コイの呼び名として、以下の段階をあげている。 ・ 孵化直後：「水仔」「毛子」「ハダカ」 ・ 体長3センチ位：「青仔」 ・ 青仔を池などに入れて秋に取り上げたもの：「新仔」「当歳」 ・ 新仔が年を越したもの：「明二才」 ・ 新仔を春に放し秋に取り上げたもの(110グラム前後)：「吸物鯉」 ・ 同(260~300グラム)：「泣き」 ・ 同(375~450グラム)：「中羽」「中羽物」 ・ 同(675~940グラム)：「切り鯉」「食用物」 「切り鯉」「食用物」は食用として出荷され、「新仔」「当歳」は種苗としてやはり取り引きされる。それに対して、「中羽」と「泣き」は種苗には大きすぎ、食用には小さすぎる。そのため、泣きの語源は「養鯉家泣かせ」、中羽の語源は「どちらにも向かない」ことにあるとされる。なお、「中羽」「泣き」「吸物鯉」を総称して、「通し返し」と呼ぶが、それは一度取り上げられた後に再び3年目に切り鯉養成用の池に戻すためである。 | 2年で食用サイズに仕立てることを標準的な養殖技術とし、それを基本にして説明される。そのため、『実地応用養魚の研究』(1932)の記述と同様に、2年で食用サイズに達しないものを「中羽」「泣き」といいマイナスイメージを付与している。 |

| | | |
|----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>⑤ 『コイ—農家養殖の新技术(改訂版)—』 昭和54年(1979)</p> | <p>「長野県や東北地方のような低水温地帯の流水養鯉では、飼育群の三分の一から四分の一ぐらいが三年目にかかってしまうところもあるが、大部分は二年で出荷できる」という。養成段階としては、種苗(稚魚)段階とキリゴイ(成魚)段階に分け、さらに種苗段階を「毛仔」(体長6,7ミリ),「青仔」(体長2.5~3センチ),「当歳」(または「新仔」,50~150グラム)に三分類している。この段階を経た後1年かけて「キリゴイ」に養成する。</p> | <p>日本の場合、コイ養殖は2年で出荷サイズまで育てるのが基本だとされる。養成に3年を要するのは、あくまで長野県や北海道のような低水温地帯に限られる。本書で種苗とされる3段階のうち前2段階の「毛仔」と「青仔」は、桜井におけるコイゴに相当する。そのため、養成段階としてはコイゴ→トウザイ→キリゴイという3段階を示していることになり、2年間で出荷サイズまで育てることと一致する。ただし、本書のなかでも、チューッパについてはふれており、「当才と切ゴイの中間ぐらいの大きさで、300~500グラムのもの」である。それはかつて種苗としてさかんに取り引きされたが、近頃では2年でキリゴイにされるようになったため、種苗として取り引きされることがなくなったとされる。このことは、まさに、チューッパという成長段階名がコイの3年飼養に伴って設けられていたことを示している。</p> |
|----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

そうしたとき、高冷地にある佐久は、まさに3年かけなくては出荷サイズにまで育てることのできないところにあったわけで、佐久ではそうした不利な点を「2年でポーっと育ったコイよりも3年かけて育てた佐久鯉の方がうまい(コイは暖かいところで2年で育てるよりも、冷たい水で3年かけた方が身が締まっとうまい)」と言い、価格ではなく味に市場での活路を見出そうとした。

そうした養殖効率の悪さを逆手に取る言説は、昭和の一時期、東京や京都・大阪といった大都市で流布した「佐久鯉」ブランドの成立と大いに関係することである。ブランドとして市場で遇されなければ、商品としては生き残れないからである。生産効率が悪いということは価格に跳ね返ってくることで、実際に佐久鯉は他産地のコイに比べて高価格で取り引きされていた。

全国の農家向けに書かれた手引き書の世界では2年飼養を有利とし3年飼養を不利としていても、実際に佐久では3年飼養が主流かつ通常な養鯉形態であったわけで、佐久ではコイの成長段階名としてチューッパは欠くことのできないものであった。当然、その名称にマイナスイメージなどない。2年目の夏を水田で過ごしたコイに対するごく当たり前の名称として存在するのである。

汎用技術の世界では、養殖の効率からすると、チューッパは落第生ということになる。2年で出荷サイズになることを一般的な基準とすれば、3年飼養地にしか存在しないチューッパ段階は、それがあっても自体、養殖効率の悪さを象徴するものであり、効率低下の張本人とさえされてしまう。しかし、3年飼養が通常の佐久ではチューッパにそうしたマイナスイメージが付与されることはなく、トウザイとキリとを結ぶひとつの成長段階としてきちんと位置づけられているのである。先に挙げた養殖効率の悪さを逆手に取る言説が成り立つのも、いわばチューッパという成長段階が存在するからであるといえよう。

2 汎用技術の限界

ごく初期の手引き書においては、水田養鯉の技術は汎用化されることなく、佐久地方とくに桜井の伝承技術がモデルとして取り上げられることが多かった。当然、そうしたときには、成長段階名も、桜井にみられるコイゴ→トウザイ→チューッパ→キリがそのまま紹介されていた。

しかし、手引き書に描かれる養鯉技術が、限られた地域にのみ通用する伝承的な在地技術から全国的な汎用技術へと書き換えられていくとき、つまりはその手引き書が全国どの地域においてもマニュアルとして使用可能なものになっていくとき、手引き書のなかのコイの成長段階名もまた同様に汎用性を持つものに換えられていくことになる。

それが「一年鯉」「二年鯉」「三年鯉」および「一歳魚」「二歳魚」「三歳魚」といった成長段階名である。これはコイの年齢つまり飼養年数をもとにした分類・命名の仕方である。一般の養魚手引き書に採用される以前は、水産学の専門書や国や県がおこなう養鯉試験の報告書のなかに多く見受けられる用語である。たとえば、水田養鯉を学問的かつ詳細に取り上げた初期の専門書である『水田養魚』[松井 1948] や長野県立農業試験場がおこなった試験結果を報告する『稲田養鯉臨時報告』[長野県立農業試験場 1910] においては、こうした分類・命名により水田養鯉について自然科学の立場から解説している。

しかし、こうした分類・命名のあり方は、一見すると科学的で厳密なものであるかのような印象を与えるが、現実の養魚現場とくに農家がおこなう零細な養魚では必ずしも有効なものとはいえないし、またときに混乱を招くことさえある。コイの年齢に基づいた分類・命名のあり方について、それが持つ矛盾および不明確さを挙げると以下ようになる。

第一点は、年齢は必ずしもコイの成長段階を表してはいないことである。詳しくは次節において論述するが、チューッパやトウザイ、キリという名称は、必ずしも年齢だけでなく、魚体のサイズや重量も含んだ概念である。それを年齢で割り切ってしまうと、養鯉の実態とは合わなくなってしまうことになる。たとえば、「二年鯉」といった場合、2年でキリ（出荷サイズ）に達するものと、もう1年イケや水田に入れて肥育しなくては出荷サイズに達しないもの（つまりチューッパ）との区別ができなくなってしまう。つまりキリには2歳のもものと3歳のもものがあることになる。養魚をおこなう農家にとっては出荷という最終段階に達しているかどうか大きな問題なのである。

そして、第二点は、「一年鯉」から「二年鯉」および「二年鯉」から「三年鯉」に変わる時期の不明確さである。こうした分類・命名法を採用した手引き書では、どれもその点を明確に示していない。その点は、水産学の専門書や水産試験場の報告書も同様である。「一年鯉」から「二年鯉」になる場合を例にとってみると、「二年鯉」になるのは、前年5月に孵化したものが年を越したとき（つまり数え年）なのか、または次年の5月を迎えたとき（つまり満年齢）なのか、または何か違う契機があるのか、そのあたりは不明確なままである。むしろ意図的にそこには触れないようにしているとさえ考えられる。この場合、最大5カ月の差が生じてしまい、出荷される時点が「二年鯉」なのか「三年鯉」なのか判然としないことがある。

こうした矛盾点や不明確さは、農家向けの養魚手引き書が佐久に伝承されてきた在地技術を基にして、その汎用化を図ろうとしたとき、研究書(手引き書とは違った学術的立場から書かれている)において用いられていた年齢に基づく分類・命名法を、その用語だけ当てはめたがため起こったことであるといえよう。その結果、「……初級入門」や「趣味と実益の……」というタイトルが示すように、農家が養魚を始めようとするとき参考とするにふさわしい入門書と銘打たれながら、現実には使えない手引き書となっていることも多い。

⑧……………成長段階名にみる民俗分類の思考——小括3——

1 成長段階の分類概念

(1) コイゴ

コイゴという成長段階はいわば時間概念で割り切れる分類である。表1に示したように、いちおう体長や重量による目安は存在しても、それに達していないからといって、もう1年コイゴのままであるということはない。コイゴの場合、孵化後1カ月ほどして水田に入れられ、取り上げられたときにはすべてトウザイとなる。

なぜコイゴという成長段階が同じ個体では繰り返されることがないかという点、それはまず第一に、その名称は「鯉子」の字が当てられていることをみてもわかるように、孵化を起点としてその約4カ月後までのごく小さな段階につけられたものだからである。いちいち体長や重量で差別化できるほど個体は大きくなっていない。また、期間的には孵化後4カ月間ほどの段階名にすぎないコイゴが翌年の水田用水期まで（つまり16カ月間にわたって）その扱いを受けることは現実にはありえないといってよい。

(2) トウザイ

コイゴ同様、トウザイもどちらかという点で時間概念で割り切れる存在である。コイゴが水田から取り上げられるときにはすべてトウザイになることができたのと同様に、翌年水田に入れられたトウザイが取り上げられるときには、やはりほとんどがチューツパになっている。トウザイからチューツパへの移行が体長や重量により制限されることはなかった。当然、同期間養成しても成長の思わしくないコイはでてくるが、そうしたコイはさらに1年トウザイとされるのではなく、小振りなチューツパという扱いを受けることになる。

そのように、佐久において一般的な農家がおこなう水田養鯉では、トウザイのほとんどは落第することなくチューツパとなることができたが、それはトウザイがチューツパと一緒に同じ水田に入れられることが多かったためである。トウザイとチューツパを一緒に入れた水田からコイを上げるときには、出荷サイズのキリに達していないものはすべてチューツパとしてしまったほうが、選別の手間を考えるとより実質的であるといえよう。

ただし、一般の農家がおこなう水田養鯉では上記のようにトウザイとチューツパを一緒にの水田に入れることが多かったが、養殖業に特化した家では両者を区別して別々の水田に入れることもあり、そうしたところでは水田に入れても十分な成長をせずチューツパの基準に達しないものはもう1年トウザイとして扱われることもあった。この点は、どんな場合でも、次の成長段階であるトウザイに移行することのできるコイゴとの違いである。

(3) チューツパ

前述のように、コイ屋ほど養鯉業に特化していない階層の家、つまり桜井では大多数を占める一般の稲作農家では、トウザイとチューツパは一緒にして同じ水田に入れてしまうことが多い。そのため水田から取り上げるときも、当然両者は混じり合った状態である。順調にいけば、チューツパ

はキリに、トウザイはチューツパになっているはずである。

しかし、実際には生育の悪いチューツパはでてくる。当然そうしたチューツパはキリに昇格することなく、次の年もチューツパと見なされ、トウザイとともに水田に入れられる。つまり結果的にそのコイはチューツパを2年おこなうことになる。また、反対に、高冷盆地の佐久ではまれなことではあるが、トウザイでもとくに成長が良かった場合には、水田から上げられた後、キリとして選別される可能性もある。その場合、チューツパという成長段階を経ることなく結果的に2年でキリに達してしまうことになる。つまり他産地にみられる2年飼養と同じことになる。

このようにチューツパ段階には、年齢や大きさにおいて多様な個体が含まれていたことがわかる。先に第3節の表2に示したように、『養鯉記』の記載では、チューツパ段階だけが飛び抜けて多様な段階名を有していたのはそのためであるといえよう。

(4) キリ

成長の最終段階であるキリは明らかに魚体の質量によってその基準が定められている。200 匁という基準を満たさない限り、それは何年経たコイであろうがキリにはなれない。つまり、コイゴやトウザイのように時間概念で割り切れる存在、つまりある一定期間が過ぎればほぼ自動的に次の成長段階に移行できるというものではない。

この基準はいわば商品として出荷するときの決まり事である。商業者側から要請されたことであるといつてよい。キリの前段階までは養魚をおこなう農家の管轄であるが、それ以降はコイを扱う魚屋や仲卸業者といった商人の管轄となる。そこには大きな断絶があり、養魚をおこなう農家から商人へと魚が移行するときの決まり事として重量 200 匁は絶対的な意味を持つことになる。そこからは、飼養した期間つまりコイを出荷できるまでに要した手間を重視する生産者と、商品の質量つまりどれだけの可食部分があるかということに最大の関心をおく商業者や消費者との意識の違いを見て取ることができよう。

その点は、ブリやボラが漁獲されたその時点における魚体の質量（サイズ）によって成長段階名が決められることと一脈通ずることである。キリの段階に至って、コイはまさに稲作農家によるドメスティケーションの対象から、商業経済のなかの商品へと変貌したことになる。

なお、キリの基準について興味深いことは、重量が魚体サイズよりも優先されることである。同じ 200 匁でもやせて細長いコイと太って短軀のコイとがいるはずであるが、その点はあまり問題にされない。それは、ひとつには、佐久鯉の場合、そのサイズ（体高と体長の比）はその時代の消費者ニーズにより微妙に変化してきているからである。⁽¹⁴⁾ 細長い姿形が市場で求められる時代があれば、また体高の高いものが人気のあるときもあり、そうしたときいつも一定の基準とされてきたのがいわゆる 200 匁という重量であるといえる。

2 成長段階名が意味するもの——2つの分類概念の交錯——

先に、桜井における水田養鯉の基本形態として、最初の2年間は水田、3年目はイケ（または水田）に入れて飼うとする3年飼養のあり方を示した。しかし、実際問題として、コイはその実年齢に合わせて水田やイケに厳密に分別され飼われていたわけではない。キリやチューツパという呼び名はコイの実年齢を必ずしも表していないからである。

前述のように、コイゴ→トウザイ→チューツパ→キリは一連の成長段階でありながら、コイゴのように時間概念に重きを置くものとキリのように質量の概念が重視されるものが同時に存在していたことがわかった。コイゴ→トウザイ→チューツパ→キリという成長段階名は、いわば、年齢という時間概念と魚体の大きさを示す質量の概念とが融合しつつも矛盾なく一連のものとして人々に認識されていたことになる。公的機関による養鯉実験など研究のレベルで用いられる概念であるところの一年鯉→二年鯉→三年鯉や一歳魚→二歳魚→三歳魚といった成長段階名、および商業レベルで多用される小鯉→中鯉→大鯉といった成長段階名は、それぞれ時間の概念または質量の概念で統一されている。そのため、そうした言い方は一見すると矛盾なくコイの成長段階を示しているように見える。しかし、それは農家がおこなう零細な水田養鯉の現場ではかえって使いづらいものであった。その点、コイゴ→トウザイ→チューツパ→キリという成長段階名は、分類基準として時間と質量という2つの概念が錯綜しているかのようにみえるが、実際にはすぐれて実践向きであり、かつ人々には分かりやすいものとなっていたといえる。

理念としては、各成長段階において年齢と魚体の質量が対応していることが望ましい。そうであるなら、時間概念に重きを置いた成長段階名と質量に重きを置いた成長段階名が同時に存在しても何ら問題ないし、どちらか片方の分類概念で統一しても必要に応じてもう一方の分類概念へ換算が可能のためやはり問題は起きない。しかし、現実には年齢は必ずしも魚体の質量に比例しているわけではない。だからこそ、年齢だけまたは魚体の質量だけで割り切った概念でコイの成長を分類し命名することができないのである。そこに、佐久におけるコイの成長段階名が時間と質量という2つの分類概念が融合したかたちで併用される意義があるといえよう。

また、ボラやブリのように、漁撈行為により得た漁獲物を商品として分類・命名するのであるなら、質量（サイズ）で割り切った方が漁業者のみならず消費者や商業者にとってもわかりやすいものになるであろう。しかし、桜井のコイの場合にはたんにキリという商品である以前に、3年にわたって継続的に育て上げられた記憶がある。そうしたとき、必然的に段階名には成長の過程が反映してくるし、それにはどうしても時間の概念を加味しなくてはならない。ここに、ドメステイケーションを背景とした分類・命名のあり方と漁撈を背景とした分類命名のあり方との大きな違いがあるといえよう。

また、前述のように、コイゴ・トウザイ・チューツパ・キリのそれぞれを見ていくと、それらは各々、時間の概念と質量の概念のバランスが異なっていることが分かる。しかも、コイゴ→トウザイ→チューツパ→キリの順にみていくと、左（コイゴ）に行くほど時間概念に強く規定されるのに対して、右（キリ）に行くほど質量の概念に規定されていることがわかる。

そのように見てくると、チューツパの位置がとくに重要な意味を持っていることに気が付くであろう。時間の概念から質量の概念へと転換していく、ちょうどその結節点となっているからである。

3 チューツパの意義

チューツパは3年飼養の地域で生まれた成長段階名であるといつてよからう。全国的にみると一般的な飼養形態であるといえる2年飼養の地では、チューツパは成長段階そのものが認められない。チューツパ段階が生じることはあくまで尋常ではないこととされ、「中途半端」「養鯉家泣かせ」と

いうマイナスイメージが付いて回った。それは前述の通りである。

では、3年飼養地において、チューツパ段階はどのような意義を持つのであろうか。チューツパは3年飼養地における水田養鯉のあり方および分類・命名の体系を探るときの鍵になる存在であると筆者は考える。ひと言でいうと、前項で述べたように、チューツパは、年齢という時間概念に重きを置いた成長段階であるコイゴ・トウザイから質量の概念に重きを置く成長段階であるキリへの移行期にある。

そうしたとき、水田養鯉をおこなう人々の立場からすると、チューツパはキリを前にして最終的な調整の期間となる。そのため、この期間は、コイは夏に水田に入れられるものとそのままイケで過ごし出荷を待つものに分けられることになる。それまで肥育の思わしくなかったコイは、イケで夏を過ごしたのではキリの基準である200匁に達しないため、秋の出荷に間に合うよう肥育を目的に3年目の夏も水田に入れられる。イケで夏を過ごすものは出荷をひかえて身を引き締める期間となる。また、そうした調整でも間に合わなければ、チューツパとしてもう1年過ごすことになる。この場合、チューツパの期間は2年間に及び、キリになるまでに都合4年を要することになる。

養殖の過程においてこのような調整がおこなわれるのは、チューツパのときだけである。そう考えると、チューツパの時期というのは、コイゴからトウザイへ、そしてチューツパへと成長段階が進んでいくとき、年齢と魚体の質量（サイズ）とがうまく合致しなくなってきた個体に対して、その成長段階を調整する役目を担っている重要な期間であるといえる。つまり、それ（コイゴ・トウザイ）まで時間の概念で分類してきたときに徐々に溜まってきた矛盾を是正し、加えて質量の概念へのスムーズな転換を図っているのが、まさにチューツパ段階であるといえよう。

コイ養殖の場合、年齢（飼養年数）に応じた標準体重が目安として存在するが、本来は年齢に象徴される時間概念と魚体の重さに象徴される質量概念とはまったく違う要素であるため、個体が小さいうちは目立たなかったそのずれが、時を経るとともに目立つようになってくる。すべての個体がそうだというのではないが、年月を経るほど同じ年齢でも質量（サイズ）のばらつきは大きくなってしまふ。また、高冷盆地にあり環境条件が厳しい3年飼養地の方が2年で基準の大きさに育てることのできる場所よりも、成長に伴うコイの個体差は大きくなると考えられる。そうしたとき、そのずれを埋め、最終的にはキリという出荷サイズにまで到達させなくてはならない。その役割がチューツパ段階なのである。

また、もう少し違った視点からみると、コイと人との関係において、実際に養鯉をおこなう稲作農家つまり生産者の論理から、コイを商品として扱う商業者およびそれを買い求める消費者の論理へと劇的な転換が図られるのがチューツパ段階であるといえよう。コイゴからトウザイまでは生産者が年齢をもとにコイの成長を見守っていくが、キリになったとたん消費者の目を意識してコイは年齢よりもその大きさや重さに目が向けられるようになるのである。その橋渡し役がまさにチューツパであったといえよう。

また、前述のように、チューツパ段階と認識されているもののなかには、二年魚を標準としながらも、三年魚やまた一年魚さえ混じることになる。しかし、人はそうしたチューツパに対して、そうした年齢の違いを意識することはない。あくまでチューツパはチューツパなのである。それはひとつには、チューツパという成長段階はコイについての認識の仕方を時間概念によるものから質量

の概念によるものへと転換する時期に当たっているからである。このことはおもしろいことを教えてくれる。

本来コイゴから順に成長段階が上がるとともに、徐々に個体数は減少し、かつ個体自体のサイズは格段に大きくなっていくことを考えると、人が養殖対象へ向けるまなごしは本来なら成長段階が進むにしたがって個への関心が増していくように考えられる。しかし、コイのドメスティケーションをみる限り、そうしたことはない。つまり成長段階が上がるとともに顕在化する個体差というものをつねに調整して全体に均してしまう思考が働いているからである。時間から質量へと認識概念の転換を図り、コイの個体差を調整するチューツパの段階がそうしたことをまさに象徴している。つまり、魚類のドメスティケーションの場合、飼養対象に関しては、つねに個への関心は低いまま保たれ、水田およびイケ1枚ごとを単位とした全体的な認識が優先されているといえる。たとえば、コイゴを入れた水田は、それが取り上げられるまでは「コイゴの田」であり、越冬のためトウザイを入れたイケはやはり「トウザイのイケ」と称されることをみても、水田やイケがコイを認識するときの最低単位となっていることがわかる。

註

(1)——いわゆる出世魚のように、同一種でありながら、その成長の過程で変化する魚の名称について、渋沢敬三[渋沢 1959]は「成長段階名」と命名している。それを筆者も踏襲する。

(2)——コイは分類学上コイ目コイ科コイ属の1属1種である。しかし、日本においては長い養鯉の歴史のなかから地方ごとに特色を持ったいくつもの品種が生み出されている。一般に日本の養鯉はヤマトゴイ(大和鯉)と呼ばれるが、各地で固定された品種としてヨドゴイ(淀鯉)・オウミゴイ(近江鯉)などと並んでサクゴイ(佐久鯉)がある。

(3)——価格変動が激しい繭への過度の依存を改め、多角的な収入源を確保してより安定的な農家経営を目指すため、とくに長野のような内陸の養蚕地域ではかねてから民間レベルでおこなわれていた水田養鯉が注目された。当時、国や県では農業試験場などにおいてさかんに水田養鯉の有効性について試験をおこなっている[長野県立農事試験場 1910]。

(4)——佐久におけるコイの養殖は、自然型の在来種であるボラゴイの飼養が始まるとされる。伝承としては、文禄年間(1592~95)にまで溯るとされるが、実際のところはよく分かっていない。また、天明年間(1781~88)になると桜井村の臼田丹右衛門によって大和の淀川からヨドゴイが桜井村へ移殖されたとする説もある[南佐久郡史刊行会 1919]。

(5)——佐久鯉のブランド名については、いわばもうひ

とつの民俗分類として、興味深い問題であるが、その命名の経緯については別に論じている[安室 1998]。

(6)——近世の農民日記である『猪六日記』からは、佐久地方において、水田と流水池を行き来しながら3年かけてコイを飼養する方法がすでに近世後期には成立していたことがうかがえる[安室 1998]。

(7)——かつて水田養鯉が盛んであった頃は、300匁(1100グラム)を超えるコイは大きすぎるという理由から市場価値が低かった。近年では反対に1キロ以上ないとキリゴイとして出荷できなくなっている。

(8)——第3段階の「中物」という言い方は、第4段階に「上物」という名称があることを考えると、コイの質を表していると解釈することもできる。そうすると、コイの分類概念は、年齢・質量(サイズ)・質の3要素が『養鯉記』には存在することになる。ただし、文意からすると、「中物」や「上物」はあくまで重量に基づく分類概念であると考えられる。

(9)——コイとは様相を異にするものの、養殖が新たな成長段階名を生む例としてハマチが挙げられる。香川県の安戸湾で始められたハマチの養殖は、もともと関西におけるブリの1成長段階名にすぎなかったハマチを全国的なものにした[川本 1982]。

(10)——チューツパからキリへの変わり目には、ひと夏イケに入れられて出荷を待つ場合もあり、必ずしも水田に入れられるとは限らない。この点は2節2項で示したとおりである。

(11)——コイアゲとはタアゲともいい、コイに関する一種の収穫祝いである。家ごとにすべてのコイを水田から取り上げ終えたとおこなった。この日、養鯉農家ではコイの収穫と養鯉作業の一段落を祝ってコイコクなどのご馳走を作る。

(12)——水田養鯉が農家副業として注目されるとともに、明治後期から昭和前期にかけて、『副業としての稲田養鯉』[長野県農商課 1930]のような稲作農家を対象にした養鯉手引き書の出版が官民挙げてさかんにおこなわれた。

(13)——本文では便宜的に在来技術と汎用技術を二項対立的に示したが、水田養鯉をめぐる技術はどこまでが住

民の経験知に基づく民俗技術であり、どこからが自然科学的な技術なのかという線引きは難しい。おそらく民俗技術を基盤としながらも、そこにさまざまな機会をとらえて自然科学的知識が加味され、昭和初期における在来技術が形成されていたと考えられる。

(14)——佐久鯉の姿形の特徴は一概に言うことはできない。明治時代にはドイツから移殖されたカガミゴイの形質が入ることで体高のあるものとなったが、昭和時代に入り中華料理(コイの丸揚)の需要が増えると徐々に長手のものへ変化した[安室 1998]。同じ佐久鯉と呼ばれていても、時代性を反映してその姿形は微妙に変化している。

参考文献

- 秋道智彌 1984 『魚と文化』 海鳴社
 阿部 圭 1932 『実地応用養魚の研究』 大日本水産会
 川本栄一郎 1982 「青森県における『鱒』の成長段階名」『文経論叢』17-3, 弘前大学人文学部
 佐久市志編纂委員会編 1988 『佐久市志 自然編』 佐久市
 佐久市野沢公民館 作製年不詳 『佐久鯉アルバム』
 桜井村 1929 『桜井時報』(昭和4年12月15日, 昭和5年11月15日) 桜井村
 桜井村農会 1923 「養鯉池ノ調査」(佐久市志刊行会蔵) 桜井村農会
 1930 『昭和5年度公文書綴』(佐久市志刊行会蔵) 桜井村農会
 渋谷敬三 1959 『日本魚名の研究』「渋谷敬三著作集 2」(1992, 平凡社) 所収
 淡水魚研究会 1984 『佐久鯉の歴史』 淡水魚研究会
 富永正雄 1979 『コイ—農家養殖の新技術—(改訂版)』 農山漁村文化協会
 富永正雄他 1971 『養魚講座 1 鯉』 緑書房
 長野県農商課 1930 『副業としての稲田養鯉』 長野県
 長野県立農事試験場 1910 『稲田養鯉臨時報告』 長野県立農事試験場
 畑 久三 1943 『水産増殖の知恵』 錦城出版社
 日暮 忠 1912 『水産養殖学』 裳華房
 蛭田浩一郎 1933 「信州佐久平に於ける用水の地理学的研究」『大塚地理学会論文集』
 松井佳一 1948 『水田養魚』 富書店
 松井 健 1975 「民俗分類の機能」『季刊人類学』6-2
 南佐久郡史刊行会 1919 『南佐久郡史』 南佐久郡史刊行会
 山山敏昭 1977 「漁業社会の魚名語彙」『国語と国文学』54-3 至文堂
 1982 「岡山県笠岡市真鍋島岩坪方言の魚名関係の語彙」『内海文化研究紀要』10 広島大学文学部内海文化研究室
 日黒辰美 1926 『趣味実益最新養鯉法』 博文館
 安室 知 1991 「水田でおこなわれる畑作」『信濃』43-1
 1996 「生態系と民俗技術」佐野賢治他編『現代民俗学入門』 吉川弘文館
 1998 『水田をめぐる民俗学的研究』 慶友社

なお、本文中の写真(1~4)は、すべて佐久市野沢公民館蔵『佐久鯉アルバム』によった。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

(2002年8月1日受理, 2002年10月4日審査終了)

Some Thoughts on Folk Classification: The Relationship between the Names of the Growth Stages for Fish and Domestication

YASUMURO Satoru

Human beings differ in the way they look at living creatures. The way people classify and name living things is the clearest indicator of how they perceive them. In this paper, I focus on how carp, which in recent times have been successfully raised in rice paddies, are classified and named, in order to examine the relationship between the Japanese people and living things.

The major difference between the names of the growth stages for fish that are called by different names as they grow larger, such as yellowtails or gray mullets, and those for carp is whether or not any domestication—any action on the part of human beings—was present in the growth process. The names of the growth stages for carp are clearly an outgrowth of fish-farming. Carp are raised over a continuous period of three years, and the following four names for their growth stages over that time have emerged: koigo; tozai; chuppa; and kiri. As the technology for raising fish has advanced, which means that the management of carp-raising has become more involved and extends over a longer period of time, people's perception of carp has grown more differentiated, resulting in an increase in the number of names for growth stages.

If we examine each individual stage of growth for carp, we find that the classification of the early stages, koigo and tozai, is based on concepts of time, while the last stage of growth, kiri, is obviously determined by the mass of the body of the fish. At first it may seem that two different concepts—time and mass—have been mixed together in the classification, but given what farmers must do to raise carp, this poses no inconsistency and is in fact useful. In looking at this process we also see that the position of the chuppa stage is particularly meaningful. That is because, in terms of the technology used by fish-farmers, it is the chuppa stage that requires the farmers to make various adjustments, which accordingly makes the chuppa stage the turning point wherein mass takes over from time as the classification concept.